3　古墳時代の遺構と遺物

（1）　住居跡

第1号住居跡（第23図）

L－39グリッドを中心に位置する。調査時には第1号住居跡と呼称していたが内側に壁溝があること、竈の左右で壁がずれることから重複あるいは拡張されたものと考え、新たに第12号住居跡の番号を追加した。ただし、遺構は確認された時点で既に床面が出ていたため新旧関係については不明である。他の遺構との関係は覆土から第20号・第28号土壙に切られていた。平面形は方形である。規模は5.20×5.35mである。主軸方位はN－72°－Eである。床面まで既に削平されていたため状態はよくなかった。貼床があったかどうかも不明である。壁溝はほぼ全周する。深さは0.05～0.1mである。主柱穴はP1～P4と思われる。深さはP1＝0.49m、P2＝0.56m、P3＝0.58m、P4＝0.54mである。貯蔵穴は竈右側の住居跡南東隅に検出された。形態は、本来は長方形か隅丸長方形と思われる。大きさは1.24×0.75m、深さは25cmである。竈は東壁ほぼ中央に検出された。袖は削平され残っていなかった。全長は1.63m、燃焼部幅0.93mである。深さはわずかに0.16mである。竈にかかって床下土壙が検出された。不整楕円形で大きさは1.5×0.8m、深さは10cmである。住居跡中央部の方形のプランも床下土壙の可能性が考えられる。

遺物は土師器片が少量出土している。また、P8から長頸壺が出土している。出土状況はピット底面より約10cmほど浮いた状態であった。遺物は胴部の半分で内面を上にして置かれたような状態であった。一番下にあたる部分は打ち欠かれて約5cmほどの孔があいている。ただし、ピットは位置的に竈の袖と重複する部分にあり住居跡に伴うかどうかは疑問である。

第4号住居跡（第25図）

N－36グリッドに位置する。第3号溝跡・第18号土壙と重複する。第18号土壙に切られているが、第3号溝跡との関係はつかめなかった。試掘調査時のトレンチにかかっていたため検出されたのは半分である。主軸方位はN－11°－Wである。平面形は方形と思われる。規模は(2.70m)×4.10mである。検出時にほぼ床面が出ていたが、南側が5cmほど掘れた。壁溝は全周する。床面からの深さは0.08mである。主柱穴はP1・P2と考えておきたい。深さはP1＝0.16m、P2＝0.34mである。貯蔵穴および竈は検出されなかったが、竈は北壁に設置されたものと考えられる。東壁際に床下土壙と思われる土壙が検出された。不整楕円形で大きさは1.18m×0.96m、深さは0.48mを測る。

遺物は出土しなかった。

第6号住居跡（第26図）

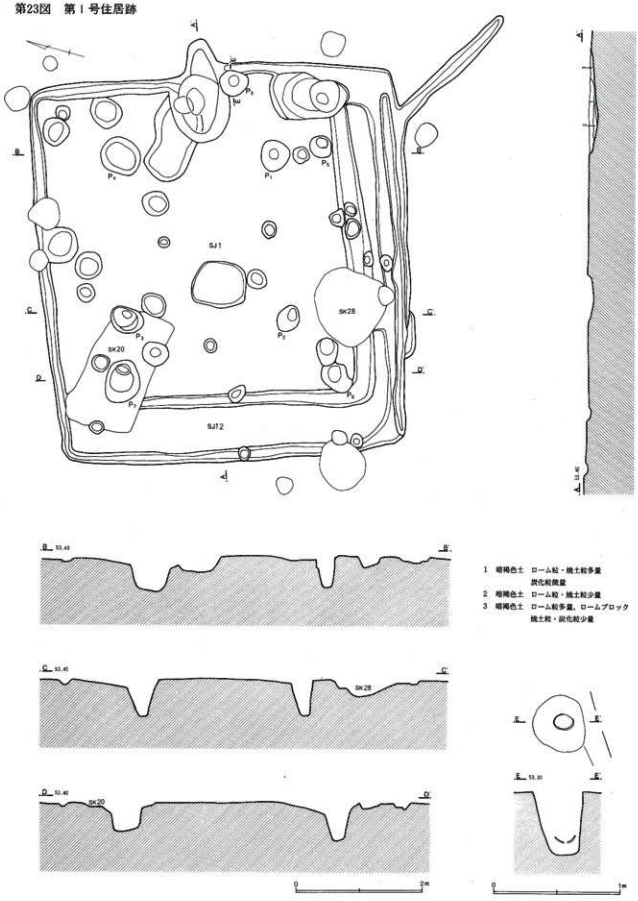
N－35グリッドを中心に位置する。直接重複する遺構はないが、第4号住居跡が10mほど東に位置する。他の住居跡と同じく確認時にはほとんど床面が出ており残りは良くなかった。平面形は方形である。主軸方位はN－39°－Eである。規模は3.14m×3.30m、深さは0.05mほどである。床面は竈前方と住居跡中央部がやや低くなっており、貼床が認められた。主柱穴はP4～P7と考えられる。深さはP4＝0.22m、P5＝0.12m、P6＝0.12m、P7＝0.04mである。貯蔵穴は検出されなかった。竈は東壁ほぼ中央に検出された。袖は残っていなかったが竈両脇で壁溝が切れることからその範囲にあったものと思われる。煙道は削平されて残っていない可能性がある。残存長は1.22m、燃焼部幅0.74mである。深さは0.1mである。貼床を剝がしたところ、住居跡中央部で床下土壙状のピットが検出された。ピットは3個連続していたが、ピットに切り合いがあるかどうかは確認できなかった。真中のピットから土器甕の上半部が逆位で出土した。

遺物は、土師器片が少量出土している。

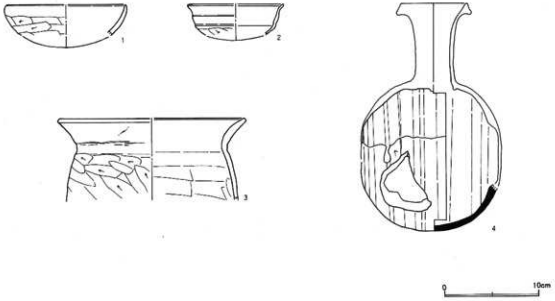
第8号住居跡（第27図）

O－41グリッドに位置する。他遺構との重複はない。他の住居跡と同じく残りは良くなかった。平面形は方形である。主軸方位はN－9°－Wである。規模は3.38

第23図　第1号住居跡


SJ1
SJ2
SK20
SK28
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
A 53.40
B 53.40
C 53.40
D 53.40
E 53.30
1　暗褐色土　ローム粒・焼土粒多量
炭化粒微量
2　暗褐色土　ローム粒・焼土粒少量
3　暗褐色土　ローム粒多量、ロームブロック
焼土粒・炭化粒少量
0
2m
1m

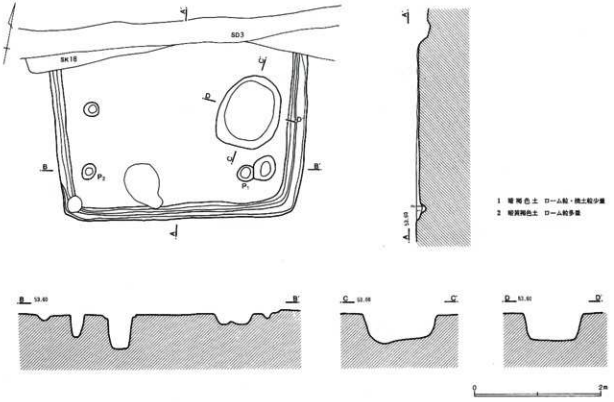
第24図　第Ⅰ号住居跡出土遺物



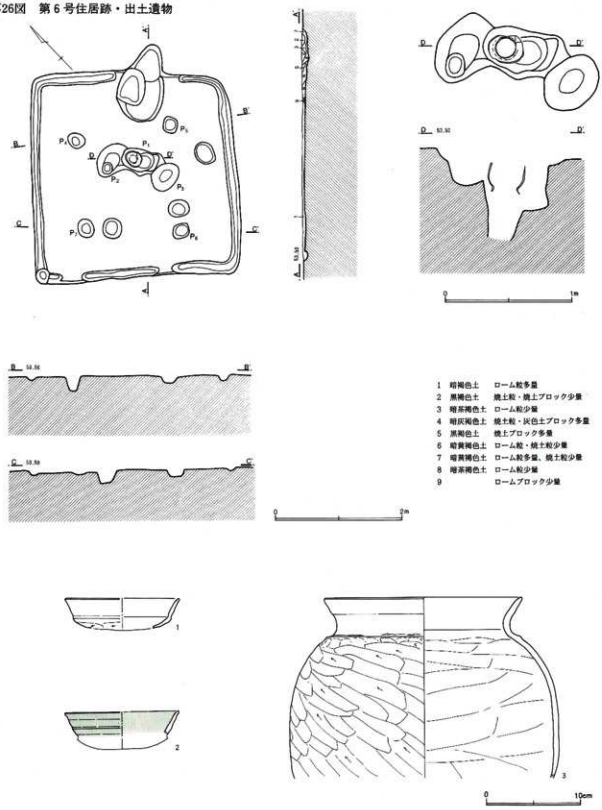
第２表　第Ⅰ号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器坏	(12.6)			DEHJ	Ⅲ	橙	20	
2	土師器坏	(10.2)			EHJ	Ⅱ	鈍い黄橙	10	
3	土師器甕	(20.0)			DEH	Ⅱ	鈍い橙	20	
4	須恵器長頸壺				EHJ	Ⅰ	灰白	40	胴部焼成後穿孔

第25図　第４号住居跡



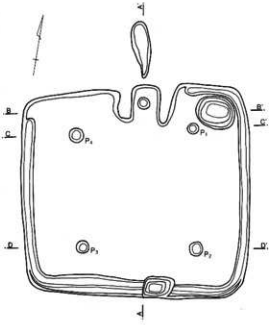
第26図　第６号住居跡・出土遺物

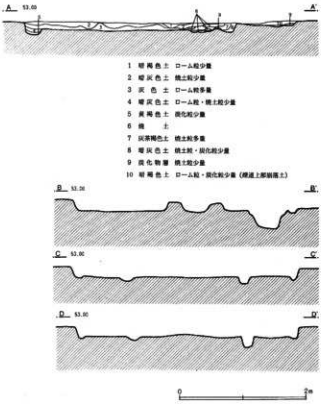


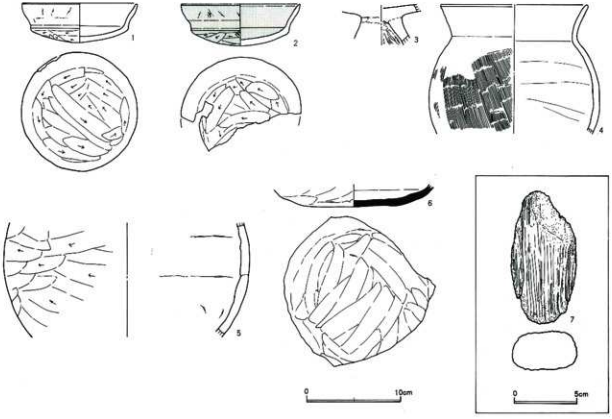
第３表　第６号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存率	備　　考
1	土師器坏	(12.0)			H	Ⅲ	橙	20	
2	土師器坏	(12.0)			H	Ⅱ	黒褐	10	内外面黒色処理
3	土師器甕	21.0			BDHJ	Ⅱ	鈍い黄橙	80	

第27図　第８号住居跡・出土遺物







第４表　第８号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存率	備　　考
1	土師器坏	12.2	4.1		BDEHJ	II	橙	95	
2	土師器坏	(12.6)	4.4		EH	II	褐灰	45	内外面黒色処理
3	土師器高坏				BDEHJ	II	鈍い赤褐	80	
4	土師器甕	(15.4)			BDEHJ	III	橙	30	外面縦方向刷毛目
5	土師器甕				BDEH	II	褐灰	10	
6	須恵器甕			11.2	EHJ	I	灰	100	

m×3.65m、深さは0.1mほどである。床面はほぼ平坦である。壁溝は北壁の竈左側のみ検出されなかった。壁溝の深さは床面から0.05m程である。柱穴は４個検出された。主柱穴と考えられる。深さはP1=0.06m、P2=0.12m、P3=0.16m、P4=0.04mである。住居跡南壁際の竈の反対側にあたるところにピットが検出された。長方形で0.47m×0.34m、床面からの深さは0.01mほどである。貯蔵穴は竈の右側、住居跡北東隅に検出された。長方形で0.62m×0.53m、床面からの深さは0.28mである。竈は北壁やや右寄りに検出された。燃焼部奥は方形の掘りこみである。袖は高さ0.11mほど残っており右袖の長さは0.66mである。燃焼部中央やや左袖に寄ったところに地山を掘り残して支脚としていた。煙道は削平され底部の一部が残っていただけである。残存長は0.80mである。

遺物は竈左袖とP1とP2の間の２箇所にまとまって検出されたが他時期の遺物の混入も見られる。

第12号住居跡（第23図）

L－39グリッドを中心に位置する。第１号住居跡のところで述べたように整理の過程で番号を追加した。他の遺構との関係は第20号・第28号土壙に切られていた。平面形はやや長方形である。主軸方位はN－80°－Eである。規模は6.25×5.89mである。壁溝はほぼ全周するが南壁部分は壁際に更に１条分の溝が検出された。深さは0.05～0.1mである。柱穴はP1・P6・P7・P4と思われる。深さはP1=0.49m、P6=0.60m、P7=0.45m、P4=0.54mである。南壁の東南隅付近から溝が南東方向に伸びている。長さは2.2mほど検出された。特に重複などは確認されなかったため、住居跡に伴う溝と考えられる。貯蔵穴および竈は他に検出されなかったため削平されたか第１号住居跡のものと同じ位置になると思われる。

遺物は第１号住居跡のものと混在している。

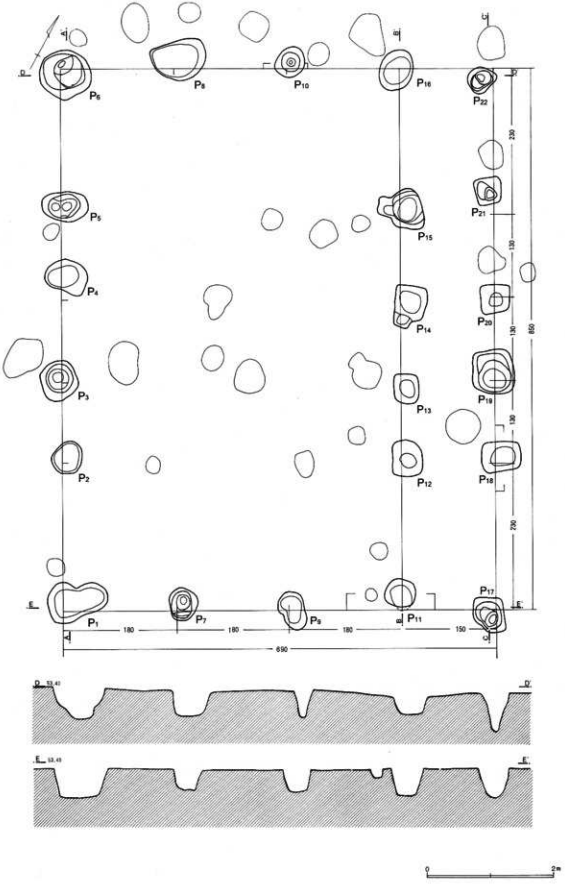
（２）　掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は６棟復原できた。掘立柱建物跡は調査区中央やや南寄りに集中していた。この部分は調査区の中でもわずかに高く、本遺跡の一番高い場所に建物を建てたものと思われる。ただし、これらの建物の全てについてその時期を古墳時代とする積極的な根拠はない。わずかに柱穴から出土する遺物は、細片であるが古墳時代に属するもので、他の時期のものは検出されていない。遺構の重複についても掘立柱建物跡の重複は認められるが住居跡などとの重複は認められない。これらのことからわずかに出土する遺物以外に積極的に時期を決定する根拠は得難い状況にある。そのためここではこれらの掘立柱建物跡について古墳時代のものとして掲載しておくが、あくまで断定できるものではない。ちなみに大寄遺跡では中世の所産と考えられる遺構、遺物も検出されており、本遺跡の掘立柱建物跡の中にはその時期に降る可能性の有るものもあると考えられる。

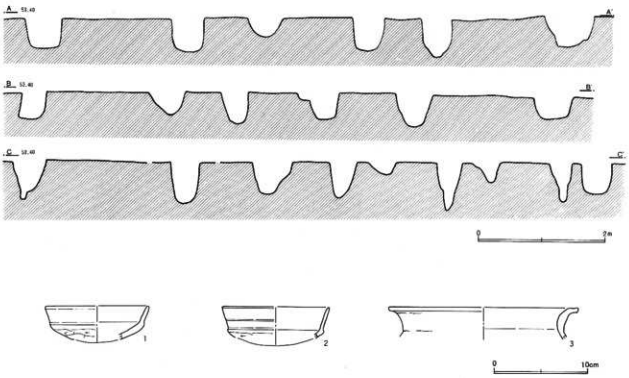
第１号掘立柱建物跡（第28・29図）

N－38グリッドを中心に検出された。第７号掘立柱建物跡と重複するが新旧関係はつかめなかった。東庇を持つ５×３間の南北棟である。主軸方位はN－29°－Wである。桁行の柱間に特徴があり、梁側の柱間が広く中の柱間３間分は狭くなる。規模は桁行8.5m、梁行5.4mほどになる。桁行の柱間は西側では南から2.40m・1.30m・1.60m・1.15m・2.25mである。梁行は南側では北から1.80m・1.80m・1.80mで庇部分は1.50mである。柱穴は径45cm～75cmの円形あるいは楕

第28図　第Ⅰ号掘立柱建物跡(Ⅰ)



第29図　第１号掘立柱建物跡(2)・出土遺物



第５表　第１号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存率	備　　考
1	土師器坏	(11.0)			DEH	Ⅲ	鈍い赤褐	15	SB1-P15
2	土師器坏	(11.2)			BEH	Ⅱ	灰黄褐	10	SB1-P15
3	土師器甕	(20.0)			BEHJ	Ⅱ	鈍い黄橙	10	SB1-P6

円形が主であるが、方形を呈するものもある。深さは30～65cmである。

遺物はやや多く出土しているが細片が多い。土師器甕の胴部破片が多く、縄文土器や刷毛目の施された破片なども混入している。

第２号掘立柱建物跡（第30図）

Ｎ－37グリッドを中心に検出された。第４号掘立柱建物跡と重複するが新旧関係はつかめなかった。４×２間の南北棟で総柱になるものと思われる。主軸方位はＮ－26°－Ｅである。規模は桁行6.8m、梁行5.1mほどになると考えられる。桁行の柱間は西側では南から1.7m・1.5m・1.5m・2.0mである。梁行は南側では西から2.9m・2.2mである。柱穴は径50cm前後の円形あるいは楕円形が主である。深さは25～48cmである。

遺物は各ピットから細片が少量ずつ出土しているが内容は第１号掘立柱建物跡と同様の傾向である。図示できる遺物は出土しなかった。

第４号掘立柱建物跡（第32図）

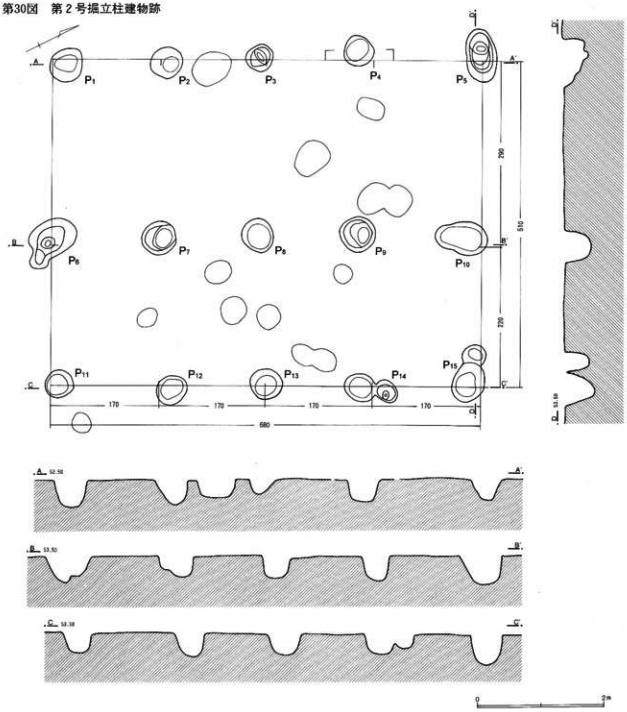
Ｎ－37グリッドを中心に検出された。第２号掘立柱建物跡と重複するが新旧関係はつかめなかった。３×２間であるが、東側の梁行の柱穴は検出されなかった。主軸方位はＮ－52°－Ｅである。規模は桁行4.2m、梁行2.8mほどになる。桁行の柱間は南側では西から1.3m・1.4m・1.4mである。梁行は西側では南から1.3m・1.5mである。柱穴は径32cm～55cmの円形あるいは楕円形が主である。深さは18cm～45cmである。

遺物は土師器坏片１、甕片２、須恵器片２が出土している。

第５号掘立柱建物跡（第33図）

Ｍ－38グリッドを中心に検出された。第６号掘立柱

第30図　第２号掘立柱建物跡



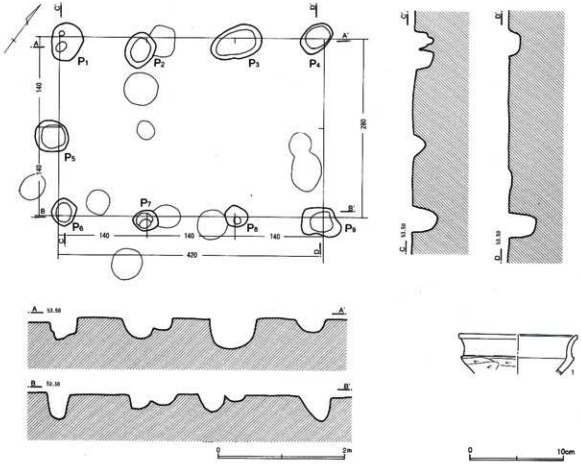
建物跡と重複するが新旧関係はつかめなかった。２×２間である。主軸方位はN－25°－Wである。北側が南側よりやや広く北側が開く感じになるが、規模は桁行３ｍ、梁行３ｍほどに復原できると思われる。柱間はおよそ1.5ｍを取っていると思われる。柱穴は径30cm～50cmの円形あるいは楕円形が主である。深さは10cm～46cmである。

遺物は土師器細片が11片出土している。

第６号掘立柱建物跡（第34図）

M－38グリッドを中心に検出された。第５号掘立柱建物跡と重複するが新旧関係はつかめなかった。２×１間であるが第５号掘立柱建物跡を一回り大きくした形である。軸方位および北側の開きなども酷似する。主軸方位はN－26°－Wである。規模は桁行3.2ｍ、梁

第31図　第４号掘立柱建物跡・出土遺物



第６表　第４号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器坏	(12.4)			BEH	II	鈍い赤褐	10	

行3.2mほどになる。柱穴は径25cm～36cmの円形あるいは楕円形が主である。深さは20cm～45cmである。

遺物は土師器片が８片出土したが実測できるものはなかった。

第７号掘立柱建物跡（第35図）

M－38グリッドを中心に検出された。第１号掘立柱建物跡と重複するが新旧関係はつかめなかった。４×３間の東西棟である。主軸方位はN－62°－Eである。規模は桁行7.6m、梁行5.7mほどになる。桁行の柱間は南側では西から1.7m・2.0m・2.0m・2.0mである。梁行は東側では南から1.9m・1.7m・1.8mである。柱穴は径38cm～65cmの円形あるいは楕円形が主である。深さは24cm～48cmである。

遺物はP2から暗文が施された坏片が、P7からは土師器坏の他に、甕の破片がややまとまって出土している。

（３）　土壙

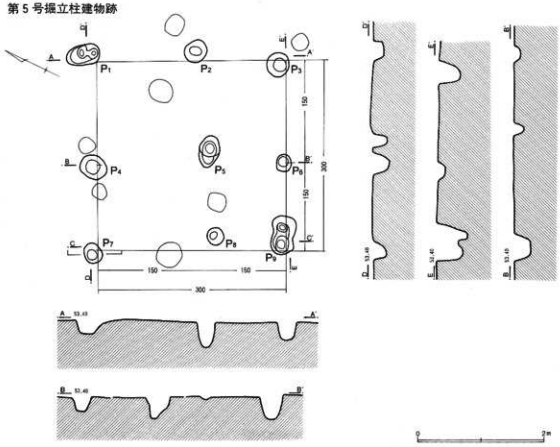
第６号土壙（第36図）

M－40グリッドに位置する。他の遺構との重複はない。平面形は不整円形である。直径2.20m、深さは0.2mである。底面はやや凹凸がある。

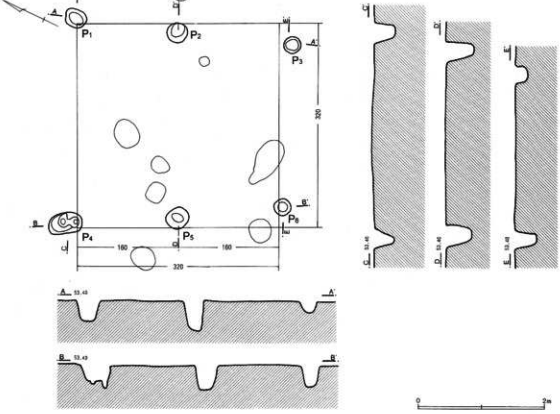
遺物は土師器片が少量出土した。

第11号土壙（第36図）

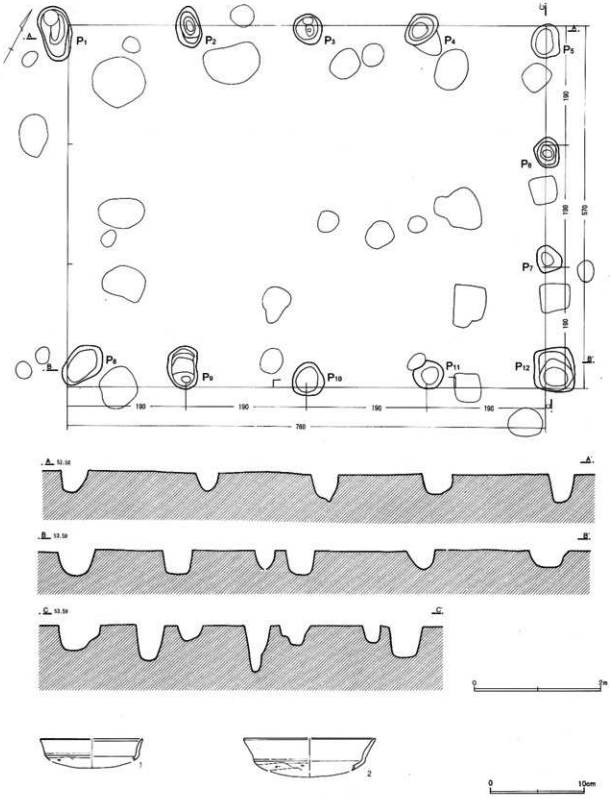
第32図　第５号掘立柱建物跡



第33図　第６号掘立柱建物跡



第34図　第７号掘立柱建物跡・出土遺物



第７表　第７号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存率	備　　考
1	土師器坏	(10.6)			BEH	Ⅲ	橙	10	
2	土師器坏	(14.0)			BEHJ	Ⅱ	鈍い橙	15	

Ｎ－40グリッドを中心に位置する。他の遺構との重複はない。平面形は不整形である。覆土はローム粒を含む暗褐色土であった。長軸で1.38m、短軸は1.12m、深さは0.85mである。断面図から判断すると、直径60cmほどのピット状の遺構が重複しているものと思われる。このピット状の部分の中ほどから下に礫が底面まで入っていた。

遺物は土師器片が少量出土した。

第12号土壙（第36図）

Ｎ－39グリッドに位置する。他の遺構との重複はない。平面形は不整楕円形である。大きさは長軸で1.15m、短軸は0.85m、深さは0.80mである。

遺物は土師器片が少量出土した。

第22号土壙（第36図）

Ｏ－38グリッドに位置する。他の遺構との重複はない。覆土は暗褐色でローム粒・焼土粒をわずかに含み、炭化粒を多く含んでいた。平面形は不整楕円形である。大きさは長軸で0.95m、短軸は0.75m、深さは0.80mである。

遺物は土師器片が少量出土した。

第28号土壙（第36図）

Ｍ－39グリッドに位置する。第１号・第12号住居跡と重複し、これより新しい。平面形は不整円形である。大きさは長軸で1.25m、短軸は1.02m、深さは0.34mである。

遺物は底面からやや浮いた状態で土師器坏、甕がややまとまって出土した。これらの遺物は第１号住居跡のものと似ており、第１号住居跡の遺物が混入した可能性も考えられる。

（４）　溝跡

溝跡は10条検出された。他の遺構と同じく上面を削平されており残りは良くない。溝の方向は概略西南から北東方向へ伸びる傾向がある。他の遺構と重複するものは少なく、むしろ他の遺構を避けて掘削されているように見受けられる。

第１号溝跡（第38図）

Ｎ－37グリッドからＫ－40グリッドにかけて検出された。調査区中央を南西から北東に伸びる。第15号土壙と重複する以外は、掘立柱建物跡や第１号住居跡を避けるように北側にやや湾曲している。東端は調査区内で消滅する。西端は第３号溝跡とわずかな距離を置いて離れ、調査区内で切れる。検出された長さは43m、幅は0.2～0.7m、深さは７cm～12cmである。覆土は暗茶褐色土であった。

遺物は、Ｌ－38・39グリッドからの出土がやや多く、土師器坏、甕などで、須恵器の破片も少量出土している。また、土師器では刷毛目の施された小破片も見られる。

第２号溝跡（第39図）

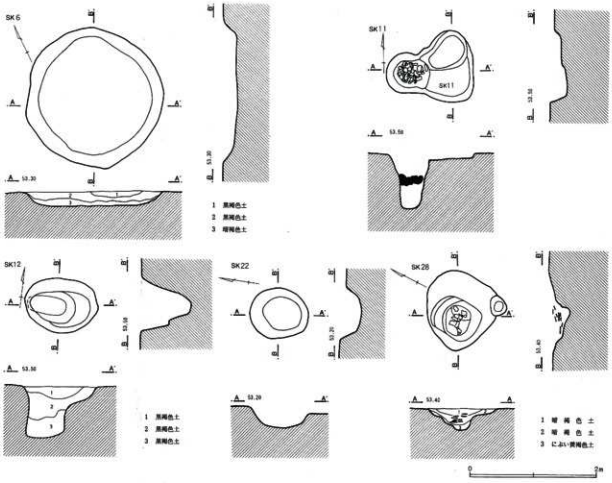
Ｌ－34グリッドからＫ－36グリッドにかけて検出された。調査区北西部を15mほど東西に伸びそこから第１号溝跡と同じく北側に湾曲する。他の遺構との重複はない。東端は調査区内で消滅する。西端は調査区外に伸びる。検出された長さは27m、幅は0.4～0.5m、深さは３cm～10cmである。覆土は暗茶褐色土であった。

遺物は少量の出土であるが、Ｌ－34グリッドでは土師器甕が１個体、溝底面から検出された。

第３号溝跡（第39図）

Ｎ－34グリッドからＮ－37グリッドにかけて検出された。第４号住居跡、第18号土壙と重複する。第18号土壙には切られているが、第４号住居跡との前後関係はつかめなかった。東西に伸びる溝で何本か枝状に分岐している。東端は第１号溝跡とわずかの所で切れる。西端は第７号住居跡の手前で切れる。検出された長さは28m、幅は0.4～0.7m、深さ５cm～15cmである。

第35図　土壙



遺物は土師器坏・甕片などが少量出土している。

第4号溝跡（第39図）

O－35グリッドからN－36グリッドにかけて検出された。第21号土壙に切られている。南西から北東に伸びる。東端は調査区内で切れる。西端は調査区外に伸びる。検出された長さは16m、幅は0.3～0.5m、深さは6cm～14cmである。

遺物は土師器坏・甕片などが少量出土している。

第5号溝跡（第39図）

O－34グリッドで検出された。他の溝と同じく北東方向に伸びると思われるが検出されたのはわずかである。他の遺構との重複はない。検出された長さは1.5m、幅は0.3m、深さは8cmである。

遺物は出土していない。

第6号溝跡（第39図）

M－35グリッドからN－35グリッドにかけて検出された。他の遺構との重複はない。北西から南東に伸びる。残存状況は悪く、検出されたのは極短い部分である。検出された長さは3.2m、幅は0.3m、深さは12cmである。

遺物は出土していない。

第7号溝跡（第39図）

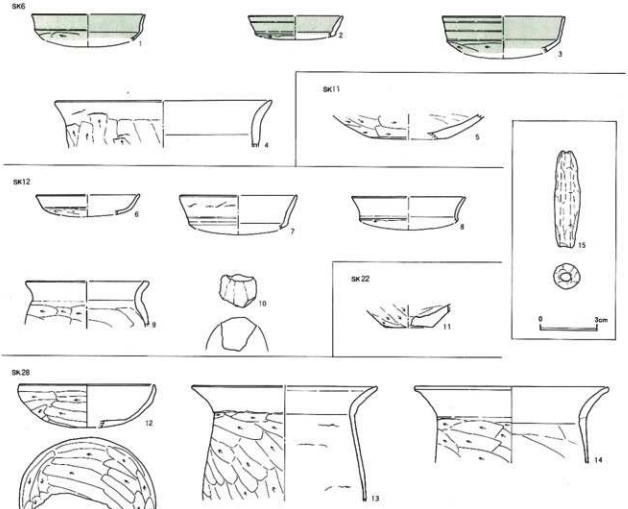
N－41グリッドで検出された。住居跡や掘立柱建物跡を避けて調査区の南東部分で検出された。他の遺構との重複はない。北西から南東に伸びる溝である。検出された長さは7.4m、幅は0.18m～0.22m、深さは5cm前後である。

遺物は出土していない。

第8号溝跡（第39図）

O－41グリッドで検出された。東西に伸びる溝で西

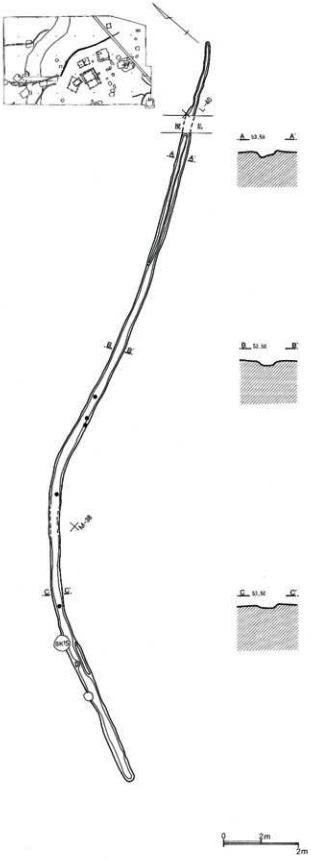
第36図　土壙出土遺物



第８表　土壙出土遺物観察表

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存率	備　　考
1	土師器坏	(12.0)			EH	Ⅱ	灰黄褐	15	SK6　黒色処理
2	土師器坏	(10.0)			EH	Ⅱ	灰黄褐	10	SK6　黒色処理
3	土師器坏	(13.0)			EH	Ⅱ	灰黄褐	10	SK6　黒色処理
4	土師器甕				BDEH	Ⅱ	鈍い橙	10	SK6
5	土師器甕			(8.4)	BDEHJ	Ⅱ	灰黄褐	15	SK11
6	土師器坏	(11.0)			EH	Ⅲ	橙	10	SK12
7	土師器坏	(12.2)			EH	Ⅲ	橙	10	SK12
8	土師器坏	(12.0)			DEH	Ⅲ	橙	10	SK12
9	土師器小型甕	(13.0)			BDEHJ	Ⅱ	鈍い赤褐	10	SK12
10	土製支脚				HJ	Ⅱ	黄灰	破片	SK12
11	土師器甑			(5.0)	BDEHJ	Ⅱ	鈍い橙	10	SK22
12	土師器坏	(14.2)	4.5		BEHJ	Ⅱ	橙	50	SK28
13	土師器甕	(19.6)			BDEHJ	Ⅱ	橙	10	SK28
14	土師器甕	(20.6)			BDEHJ	Ⅱ	鈍い橙	80	SK28
15	土錘	長さ5.1	径1.4	孔径0.45	EHJ	Ⅱ	橙	100	重さ7.97g　SK18

第37図　第１号溝跡



端は調査区内で切れる。東端は第９号溝跡に接続する。他の遺構との重複はない。検出された長さは７ｍ、幅は0.15ｍ～0.25ｍ、深さは20㎝～30㎝である。

遺物は出土していない。

第９号溝跡（第39図）

Ｏ－41グリッドで検出された。第８号・第10号溝跡が接続する。南側にある第８号溝跡を避けて南西から北東に大きく曲がっている。南端および東端ともに調査区外に伸びる。検出された長さは10.1ｍ、幅は0.35ｍ～0.45ｍ、深さは９㎝～12㎝である。

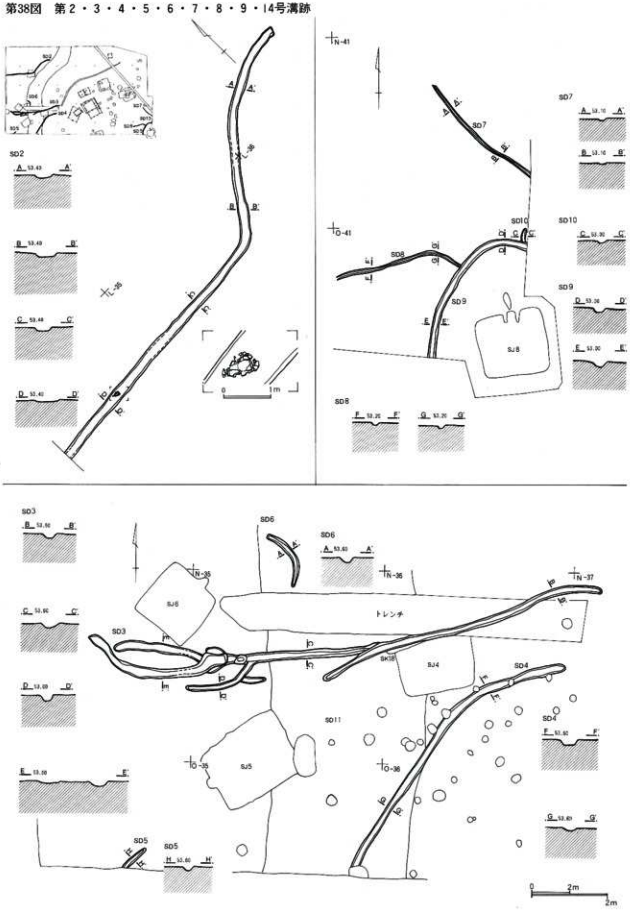
遺物は土師器細片が少量出土しているが実測できるものはなかった。

第10号溝跡（第39図）

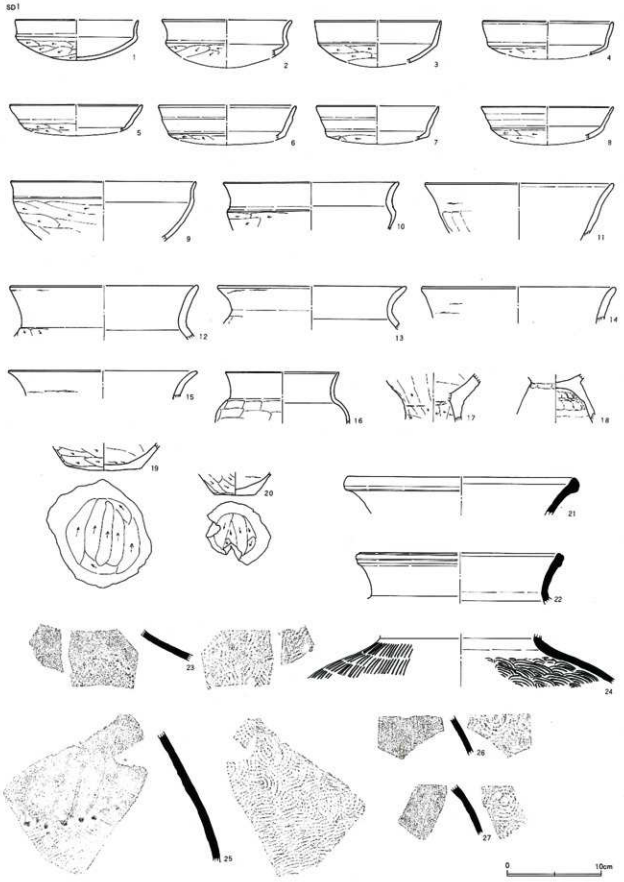
Ｏ－41グリッドで検出された。調査区際で検出された。南端は第９号溝跡に接続する。検出された長さは0.8ｍ、幅は0.25ｍ、深さは６㎝である。

遺物は出土しなかった。

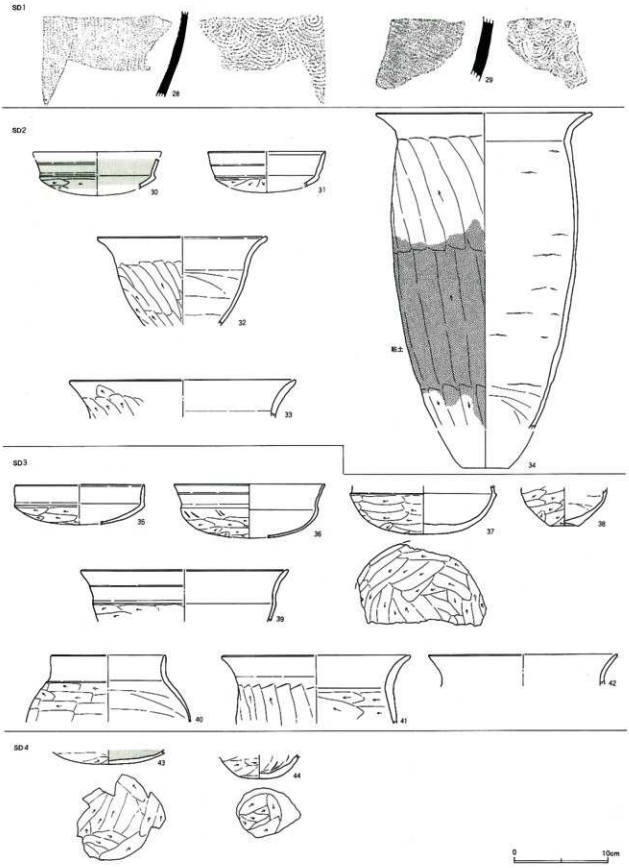
第38図　第2・3・4・5・6・7・8・9・14号溝跡



第39図　溝跡出土遺物(1)



第40図　溝跡出土遺物(2)



第９表　溝跡出土遺物観察表

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存率	備　　考
1	土師器坏	(13.0)	4.2		BEHJ	Ⅲ	橙	10	SD1
2	土師器坏	(13.6)			BHJ	Ⅱ	橙	15	SD1
3	土師器坏	(13.4)			EHJ	Ⅱ	橙	10	SD1
4	土師器坏	(13.6)			DEH	Ⅱ	鈍い褐	10	SD1
5	土師器坏	(14.0)			BEH	Ⅱ	灰黄褐	10	SD1
6	土師器坏	(14.4)			DEH	Ⅱ	橙	20	SD1
7	土師器坏	(13.0)			EHJ	Ⅱ	鈍い黄橙	10	SD1
8	土師器坏	(14.0)			DEH	Ⅱ	橙	10	SD1
9	土師器鉢	(19.6)			EHJ	Ⅲ	橙	15	SD1
10	土師器鉢	(18.6)			BDEHJ	Ⅱ	灰褐	10	SD1
11	土師器鉢	(20.0)			BEHJ	Ⅱ	鈍い橙	10	SD1
12	土師器甕	(20.0)			BDEH	Ⅱ	鈍い橙	10	SD1
13	土師器甕	(20.0)			BEHIJ	Ⅱ	橙	10	SD1
14	土師器甕	(20.4)			DEH	Ⅱ	鈍い橙	10	SD1
15	土師器甕	(20.0)			DEHJ	Ⅲ	灰褐	10	SD1
16	土師器小型甕	(12.0)			H	Ⅲ	橙	15	SD1
17	土師器台付甕				BDEH	Ⅱ	鈍い橙	25	SD1
18	土師器台付甕				BEHJ	Ⅱ	鈍い橙	80	SD1
19	土師器甕			7.8	BDEH	Ⅱ	黒褐	100	SD1
20	土師器甕			4.4	DEHJ	Ⅲ	鈍い赤褐	80	SD1
21	須恵器甕	(24.0)			EH	Ⅰ	灰	10	SD1
22	須恵器甕	(21.0)			EHJ	Ⅰ	灰	10	SD1
23	須恵器甕				EH	Ⅰ	灰	破片	SD1
24	須恵器甕				EHJ	Ⅰ	灰	10	SD1
25	須恵器甕				EH	Ⅰ	灰	破片	SD1
26	須恵器甕				EH	Ⅰ	灰	破片	SD1
27	須恵器甕				EH	Ⅰ	灰	破片	SD1
28	須恵器甕				EH	Ⅰ	暗灰	破片	SD1
29	須恵器甕				EHJ	Ⅱ	灰褐	破片	SD1
30	土師器坏				EHJ	Ⅱ	灰褐	10	SD2　黒色処理
31	土師器坏	(12.4)			DEHJ	Ⅱ	褐灰	10	SD2　黒色処理
32	土師器鉢	(18.0)			BEHJ	Ⅱ	鈍い橙	15	SD2
33	土師器甕	(24.0)			BEHJ	Ⅱ	灰褐	10	SD2
34	土師器甕	(22.8)			BDEHJ	Ⅱ	鈍い橙	40	SD2　胴部外面粘土付着
35	土師器坏	(13.6)			DEH	Ⅱ	橙	25	SD3
36	土師器坏	(16.0)			BEHJ	Ⅲ	鈍い橙	70	SD3
37	土師器坏				BEHJ	Ⅱ	鈍い黄橙	45	SD3
38	土師器小型甕			(3.0)	BCEHJ	Ⅱ	鈍い橙	30	SD3
39	土師器鉢	(22.0)			BDEHJ	Ⅲ	橙	20	SD3
40	土師器小型甕	(12.0)			ABDEH	Ⅲ	鈍い橙	40	SD3
41	土師器甕	(20.0)			BDEHJ	Ⅲ	鈍い橙	10	SD3
42	土師器甕	(20.0)			BDEHJ	Ⅲ	明赤褐	10	SD3
43	土師器坏				EH	Ⅱ	橙	40	SD4　内面黒色
44	土師器甕			4.4	BEHJ	Ⅱ	黒褐	90	SD4

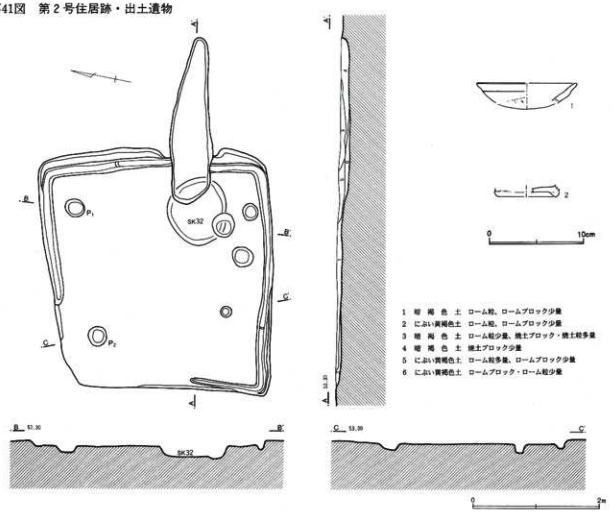
4　平安時代の遺構と遺物

（１）　竪穴住居跡

第３号住居跡（第42図）

Ｍ－40グリッドに位置する。縄文の住居跡である第３号・第９号住居跡を切っている。確認時には西隅部分が既に床面が出ていた。他の部分も極めて浅く遺存状態は良くなかった。平面形は方形であるが竈の両側は壁が壁溝より10cm程外側に張り出している。規模は3.82m×3.62m、深さは深い所で0.06mほどである。

第41図　第２号住居跡・出土遺物



第10表　第２号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器坏	(10.6)			EH	II	鈍い褐	10	
2	須恵器高台付坏			(6.0)	HJ	II	灰	10	

壁はほとんど残っていない。床面は東側の竈方向に向かってやや低くなる。柱穴は６個検出されたが、Ｐ1、Ｐ2がそれらしいが他は不明である。壁溝は、西隅部分で切れる。床面からの深さは0.1m前後である。貯蔵穴は検出されなかった。竈は東壁右寄りに検出された。燃焼部から煙道まで緩やかに続くものでその境は明瞭でない。袖は残っていなかった。規模は長さ2.62m、燃焼部の幅0.50m、深さは0.15mである。

竈にかかる部分に床下土壙が検出された。1.10m×0.95mの楕円形である。

遺物は土師器小片が少量と須恵器甕の小破片が１片出土した。

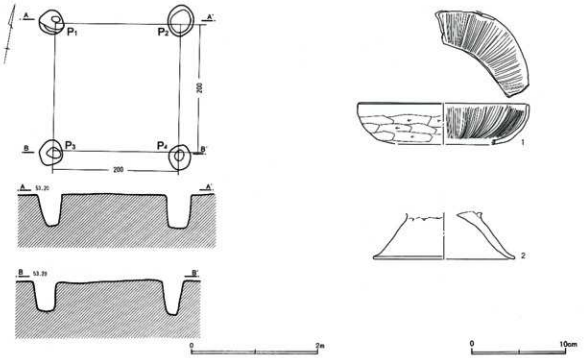
（２）　掘立柱建物跡

第３号掘立柱建物跡（第42図）

Ｋ－39グリッドで検出された。遺構の集中する部分から離れて、調査区の北側で検出された。他の遺構との重複はない。１×１間であることから竪穴住居跡の柱穴の可能性も考えられる。主軸方位はＮ－9°－Ｅである。柱間は2.0m×2.0mである。柱穴は径35cm～40cmの円形あるいは楕円形である。深さは約50cmである。

遺物はＰ2から暗文坏と台付甕破片が出土している。

第42図　第３号掘立柱建物跡・出土遺物



第11表　第３号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存率	備　　考
1	土師器坏	(18.0)	4.3	(14.0)	BHJ	II	橙	25	P2　内面放射状暗文
2	土師器台付甕			(15.0)	BDEH	II	橙	15	P2

第43図　第１号井戸跡・出土遺物

(3) 井戸跡

第1号井戸跡（第43図）

M−37グリッドで検出された。住居跡や掘立柱建物跡と離れ、調査区の中央部やや西寄りに位置する。他の遺構との重複はない。覆土は5層観察された。円形で直径1.6m、深さは1.2mである。

遺物は土師器細片が少量および須恵器片が2点出土したのみで、実測図には須恵器高台坏を示した。遺構の時期は9世紀のものと考えておきたい。

第12表　第1号井戸跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵器高台付坏			(8.0)	EHJ	I	灰	10	

(4) 土壙

以下に記述する土壙については遺物が出土していないものも含まれる。遺構の重複のあるものについては新旧関係からある程度時期の類推できるものもあるが、そうでないものについてはその時期を判断するのは困難である。便宜状ここに一括して記述する。

土壙は形態から、円形、不整形、長方形を基調とするものなどに大別できる。中には中世以降に降るものもあると思われる。

第1号土壙（第44図）

K−41グリッドで検出された。他の遺構との重複はない。長辺の一方が膨らんでいるが長方形基調と思われる。底面は北側に傾いている。大きさは1.62m×0.9m、深さは18cmである。

遺物は出土していない。

第2号土壙（第44図）

K−41グリッドで検出された。第1号土壙の西側に位置する。他の遺構との重複はない。不整形である。西側は階段状の段を持つ。大きさは1.08m×0.88m、深さは12cmである。

遺物は出土していない。

第4号土壙（第44図）

M−41グリッドで検出された。他の遺構との重複はない。不整形である。底面は凹凸があり、中央部が低い。大きさは1.84m×1.05m、深さは15cmである。

遺物は出土していない。

第5号土壙（第44図）

L−41グリッドで検出された。他の遺構との重複はない。不整形である。底面は西側に段を持つ。大きさは1.15m×1.00m、深さは16cmである。

遺物は出土していない。

第7号土壙（第44図）

M−39・40グリッドで検出された。他の遺構との重複はない。L字型を呈する。底面は中央東壁際が一段窪んでいる。大きさは2.04m×1.04m、深さは40cmである。

遺物は出土していない。

第13号土壙（第44図）

M・N−39グリッドで検出された。第1号掘立柱建物跡の東側に位置する。小ピットが重複している。楕円形である。底面は南側に傾斜している。上面の東から南側にかけて浅い段を持つ。大きさは1.04m×0.82m、深さは25cmである。

遺物は出土していない。

第15号土壙（第44図）

M−37グリッドで検出された。第1号溝跡と重複する。第1号溝跡より古い。円形を呈する。底面はほぼ平坦である。大きさは直径約1m、深さは30cmである。

遺物は出土していない。

第16号土壙（第44図）

M−37グリッドで検出された。第1号溝跡の西側に位置する。他の遺構との重複はない。隅丸方形である。底面はやや凹凸がある。残存状況が悪く浅い。大きさは1.26m×1.38m、深さは8cmである。

遺物は出土していない。

第18号土壙（第44図）

M－36グリッドで検出された。第３号溝跡・第４号住居跡と重複する。第４号住居跡より新しく、第３号溝跡より古いと思われる。長方形と思われる。残存している部分は2.35m×0.25m、深さは５cmである。

遺物は土師器小片が少量出土しているが、住居跡の遺物が混入している可能性がある。

第20号土壙（第44図）

L－39グリッドで検出された。第１号住居跡と重複している。第１号住居跡より新しい。長方形を呈する。小ピットがいくつかあるが、土壙に伴うものかどうかわからない。大きさは2.04m×1.04m、深さは８cmである。

遺物は出土していない。

第21号土壙（第44図）

O－35グリッドで検出された。第４号溝跡と重複する。第４号溝跡より新しい。長方形になるものと思われる。検出されたのは0.60m×1.0m、深さは25cmである。底面に７cmほどのピットが検出されたが遺構に伴うものかどうかわからない。

遺物は出土していない。

第23号土壙（第44図）

M－40・41グリッドで検出された。中央部を攪乱によって壊されている。第３号住居跡と重複する。これより新しい。不整楕円形である。底面は西側がピット状に深くなる。大きさは3.86m×1.34m、深さは55cmである。

遺物は諸磯b式期の破片が４片出土しているが第３号住居跡のものと思われる。

第24号土壙（第44図）

M－40・41グリッドで検出された。第３号住居跡と重複する。これより新しい。隅丸長方形である。底面は西側に向かって深くなる。大きさは1.60m×0.95m、深さは15cmである。

遺物は出土していない。

第25号土壙（第44図）

M－41グリッドで検出された。第３号住居跡と重複する。これより新しい。長方形である。底面はほぼ平坦である。大きさは1.70m×0.35m、深さ18cmである。

遺物は出土していない。

第26号土壙（第44図）

M－40グリッドで検出された。第３号・第９号住居跡と重複する。これらより新しい。不整円形である。底面はやや起伏があるもののほぼ平坦である。大きさは直径約1.60m、深さは60cmである。

遺物は諸磯b式期の破片が少量出土しているが第３号住居跡あるいは第９号住居跡のものと思われる。

第27号土壙（第44図）

N－40グリッドで検出された。他の遺構との重複はない。隅丸長方形である。底面は中央部がやや窪むがほぼ平坦である。北西隅に小ピットが検出されたが土壙に伴うものかどうか不明である。大きさは2.08m×1.00m、深さは34cmである。

遺物は細片が少量出土している。

第29号土壙（第44図）

N－41グリッドで検出された。南側の大部分を攪乱によって壊されている。他の遺構との重複はない。長方形である。底面は平坦である。大きさは2.68m×0.92m、深さは８cmである。

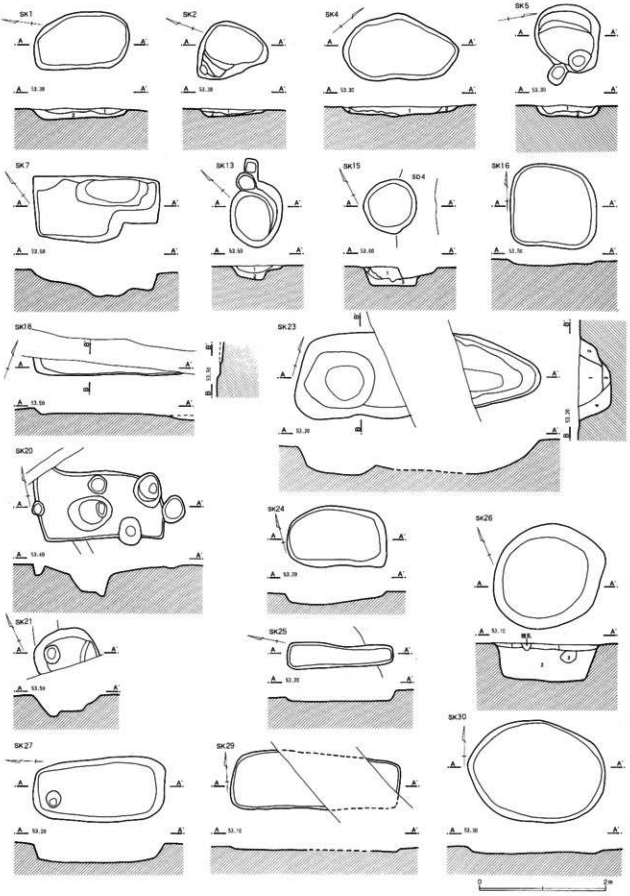
遺物は出土していない。

第30号土壙（第44図）

N－39・40グリッドで検出された。第31号土壙と隣接する。楕円形である。底面はほぼ平坦である。大きさは2.22m×1.60m、深さは10cmである。

遺物は出土していない。

第44図　土壙


SK1
SK2
SK4
SK5
SK7
SK13
SK15
SD4
SK16
SK18
SK23
SK20
SK24
SK26
SK21
SK25
SK27
SK29
SK30

土壌土層注記

ＳＫ１
1　黒褐色土　ロームブロック少量
2　黒褐色土　ロームブロック・ローム粒少量
ＳＫ４
1　暗褐色土　ロームブロック多量、ローム粒少量
2　褐 色 土　暗褐色土ブロック少量
ＳＫ13
1　黒褐色土　ローム粒、ロームブロック少量
2　暗褐色土　ロームブロック多量

ＳＫ23
1　暗 褐 色 土　ローム粒、焼土粒少量
2　暗黄褐色土　ローム粒多量
3　黒 褐 色 土　ローム粒少量
4　暗黄褐色土　ローム粒・焼土粒少量

ＳＫ２
1　黒褐色土　ロームブロック少量
2　黒褐色土　ロームブロック・ローム粒少量
ＳＫ５
1　黒褐色土　ロームブロック、ローム粒少量
2　褐 色 土　ロームブロック多量
ＳＫ15
1　暗褐色土　ローム粒、炭化粒少量
2　暗褐色土　ローム粒・ロームブロック少量
3　暗褐色土　ロームブロック多量
ＳＫ26
1　暗 褐 色 土　ローム粒・焼土粒少量
2　暗茶褐色土　ローム粒多量、焼土粒少量
3　暗黄褐色土　ロームブロック多、ローム粒少量

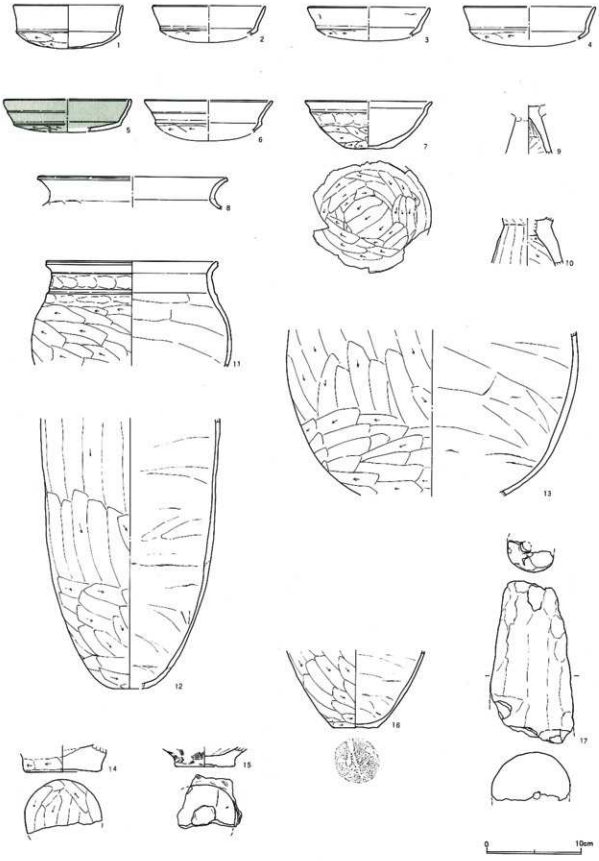
５．グリッド・その他出土の遺物

グリッドやピットから出土した遺物は、量的に多いのは縄文土器であり、古墳時代以降のものは少ない。古墳時代以降のものでは、土師器が多く須恵器はほとんど見られない。この傾向は遺構から出土する須恵器が土師器よりはるかに少ないのと同じである。遺物の時期はまず前期の刷毛目の施された破片が少量混じっている。これらは遺構にも少量混入している。この時期の遺構は検出されなかったが、周辺にこの時期の遺構があるか、或いは既に削平されてしまったものと思われる。一番出土量が多いのは古墳時代後期の遺物である。細片が多いため図示できるものは限られる。平安時代のものは少量であり遺構の少なさに比例するものであろう。

第13表　グリッド出土遺物観察表

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存率	備　　考
1	土師器坏	(11.6)	4.6		ABEHJ	Ⅲ	鈍い橙	40	表採
2	土師器坏	(12.0)			EH	Ⅲ	橙	10	N-36　P2
3	土師器坏	(12.8)			AEHJ	Ⅱ	鈍い橙	10	L-41　P4
4	土師器坏	(14.0)			ABH	Ⅲ	鈍い橙	10	N-36　P2
5	土師器坏	(13.4)			BDEHJ	Ⅱ	灰褐	25	O-40　№22　黒色処理
6	土師器坏	(13.4)			BEHJ	Ⅱ	鈍い橙	10	L-41　P4
7	土師器坏	(13.4)	5.0	5.2	BCEHJ	Ⅱ	鈍い橙	70	N-41　№6
8	土師器甕	(20.0)			BCDEHJ	Ⅲ	鈍い橙	10	O-38　P3
9	土師器高坏				BDEHJ	Ⅲ	明赤褐	25	O-38　P1
10	土師器高坏				ABEHJ	Ⅱ	鈍い橙	20	O-38　P1
11	土師器甕	(18.0)			BEHJ	Ⅱ	鈍い褐	70	N-41
12	土師器甕			(4.0)	BEHJ	Ⅱ	鈍い赤褐	40	L-34
13	土師器甕				ABEHJ	Ⅱ	橙	15	M-39　P1
14	土師器甕			8.0	ABEHJ	Ⅱ	鈍い橙	50	O-39　№63/64
15	土師器甕			(6.4)	BEHJ	Ⅱ	橙	40	M-39　P4
16	土師器甕			4.8	ABEHJ	Ⅱ	暗褐	70	L-40　P2　木業痕
17	支脚				EH	Ⅲ	鈍い褐	50	L-41　P1

第45図　グリッド出土遺物



Ⅴ 沖田Ⅱ遺跡

1　遺跡の概要

本遺跡の調査は平成８年度と９年度に分けて行われた。平成８年度の調査では若干の遺物の散布が見られたものの、遺構は検出されなかった。平成９年度の調査では河川跡１条と土壙３基、溝跡１条、ピット４基を検出したにとどまった。遺物は縄文土器片と土師器片が少量出土している。

遺跡の現状は水田である。立地は低地部分にあたり肉眼では周囲の地形よりあまり高いとは見えない。標高は検出面で53.5m前後であり沖田Ⅰ遺跡・沖田Ⅱ遺跡よりむしろ高めである。遺跡の位置関係は沖田Ⅰ遺跡と同じく、大寄遺跡と宮西遺跡に挟まれた低地部分にあり、沖田Ⅰ遺跡の南西にあたる。迅速図および昭和36年の地形図にもこの部分は水田となっていることから、地形的には低地部分にあたることは間違いないであろう。他の遺跡の遺構分布を見ると、微高地上に遺構が構築されることが多く、低地部分には遺構はあまり見られない。本遺跡においても遺構は極端に少ない状況である。縄文時代の遺物も河川跡の周辺に分布するものである。おそらく河川跡に沿って必要なときにだけ活動するような場所だったのではないかと思われる。あるいはまた、さきの圃場整備事業によって遺構が削平されたことも考えられる。

2　検出された遺構と遺物

検出された遺構は土壙３基、溝跡１条、河川跡１条、ピット４基である。遺構の分布は調査区東側に偏っている。河川跡は東西方向に伸びているが、大半は平成８年度と９年度の調査区の間にある道路の下に入っている。

遺物は縄文土器片がグリッドから出土した。他にこれらの遺構に伴う遺物は、河川跡から土師器片、須恵器片がわずかに３片出土しているのみである。よって遺構の時期を断定することは極めて困難である。ここでは検出された遺構と遺物について別々に記述することとする。

（１）　遺構

a　土壙

第１号土壙（第48図）

Ｘ－24グリッドで検出された。河川跡の底面に掘り込まれている。隅丸長方形で底面は不整楕円形である。長軸1.0m、短軸0.78m、深さ0.26mである。

遺物は出土しなかった。

第２号土壙（第48図）

Ｖ－25グリッドで検出された。河川跡の肩の部分にかかる。楕円形の掘り込みで長軸1.40m、短軸0.82m、深さ0.21mである。

遺物は出土しなかった。

第３号土壙（第48図）

Ｘ－24グリッドで検出された。河川跡の肩の部分にかかる。円形の掘り込みで、直径0.9m、深さは0.40mである。

遺物は出土しなかった。

b　溝跡

第１号溝跡（第47図）

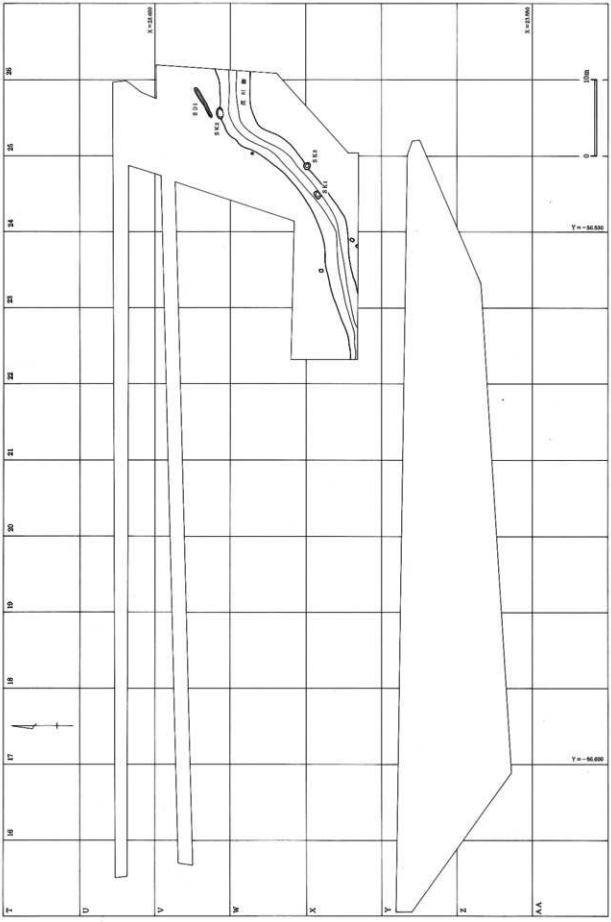
Ｖ－25グリッドで検出された。他の遺構との重複はない。南西から北東に伸びる。検出された長さは4.28m、幅は0.33m～0.39m、深さは10cm～15cmである。

遺物は出土しなかった。

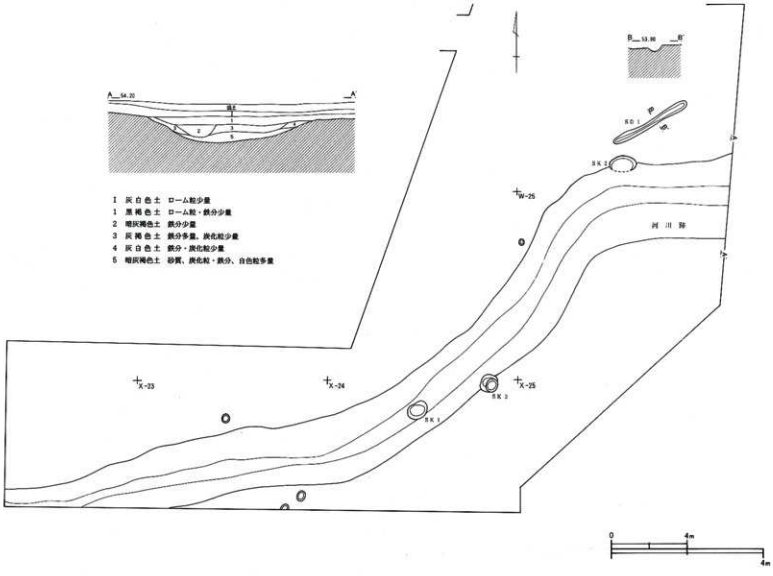
c　河川跡（第47図）

Ｖ－26グリッドからＸ－22グリッドにかけて検出された。調査時には第１号溝跡と呼称したものである。東側は調査区外に伸びる。西側については平成８年度

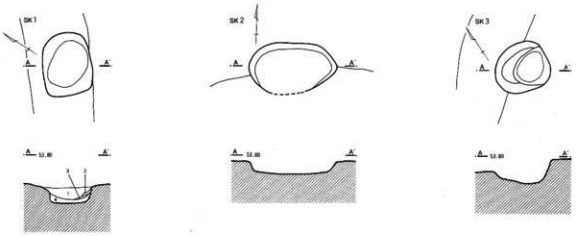
第46図　沖田Ⅱ遺跡全体図



第47図　遺構全測図

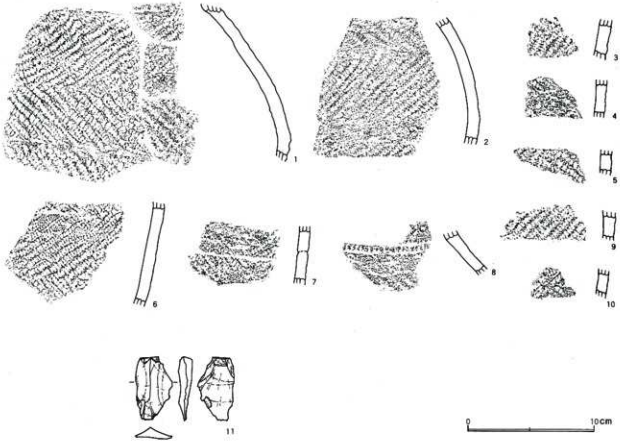

A 54.20 A'
B 53.90 B'
1 灰白色土 ローム粒少量
1 黒褐色土 ローム粒・鉄分少量
2 暗灰褐色土 鉄分少量
3 灰褐色土 鉄分多量、炭化粒少量
4 灰白色土 鉄分・炭化粒少量
5 暗灰褐色土 砂質、炭化粒・鉄分、白色粒多量
SK 1
SK 2
SK 3
SD 1
W-25
X-23
X-24
X-25
河川跡
0
4m

第48図　土壙



SK1
1　黒 色 土　炭化物少量
2　褐 色 土　砂質、白色粒少量、鉄分多量
3　黒 色 土　ローム粒・炭化物少量
4　灰黒色土　灰褐色粘土多量、白色粒少量

第49図　縄文時代の遺物



の調査では検出されていないことから道路の下を西に伸びるものと思われる。検出された長さは45.4m、上幅は3.1m～4m、底面の幅は0.4m～1.2m、深さは東側が浅く0.4m、西側は0.7mである。土層断面の観察からは堆積が進行する過程で川幅と深さを減じながら少なくても3時期の変遷が読み取れる。

遺物は堆積土中から土師器2片、須恵器甕1片が出土している。

(2) 遺物

a 縄文時代の遺物（第49図）

遺構からの遺物の出土はなかったがX－24グリッドで深鉢片が出土した。遺構の存在を予想し周辺の確認を行ったが、遺構は確認できなかった。

1～10は同一個体と思われ、強く括れながら口縁部が開き、胴部が張る器形を呈する縄文前期の有尾系土器と思われる。縄文は原体の長い単節RLとLRによる羽状縄文で、胎土に繊維を多く含む。5は胴部の括れ部の破片で、2本の爪形文で区画する。

11は縦長の剥片で、未使用である。

b 平安時代の遺物（第50図）

平安時代の遺物は極めて少なく、河川跡の覆土中から土師器坏片と須恵器甕の胴部破片が出土したのみである。いずれも小片で出土層位は不明である。

第50図　平安時代の遺物

第14表　平安時代の遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器坏	(12.0)	3.0	(9.2)	BEHJ	II	橙	15	
2	須恵器甕				EHJ	I	褐灰	破片	

Ⅵ 沖田Ⅲ遺跡

1　遺跡の概要

本遺跡は沖田Ⅰ遺跡・沖田Ⅱ遺跡と同じく狭小な微高地上に立地する。遺跡周辺の環境については既に述べたとおりで沖田Ⅰ遺跡・沖田Ⅱ遺跡とよく似ている。

遺跡の時期は縄文時代前期、古墳時代、平安時代以降である。

縄文時代では竪穴住居跡３軒が検出された。竪穴住居跡の時期は諸磯式期で調査区西側に分布が見られる。住居形態は方形あるいは長方形で壁柱穴が疎らに廻る。

遺物は、多くはないが溝などに混じって花積下層式の破片も確認された。

古墳時代前期では、方形周溝墓７基、それに切られる竪穴状遺構５基が検出された。遺物がなく明確な時期は決定できないが、遺跡内からは刷毛目の付いた破片がごくわずかではあるが出土している。

後期では竪穴住居跡10軒、溝跡14条が検出された。竪穴住居跡は全体が調査できたのは７軒である。竈は北西から北東向きのものが多いが、南西を向いたものが１軒ある。溝跡は南西から北東方向に伸びる特徴があり、竪穴住居跡と切り合うことは殆どない。ただし、第４号溝跡については住居跡を切っており、時期が降る可能性がある。第12号住居跡に平安時代の遺物が混じっており、これについては出土位置が不明であるため、第４号溝跡の遺物である可能性も否定できない。

平安時代の遺構は井戸跡１基、道路状遺構１条、溝跡２条、土壙12基と判断したが明確に時期を決定できる根拠に欠けるものが多い。遺物がほとんどなく、ごくわずかなものから判断したものである。

中世以降については土壙墓が１基検出された。覆土上層に浅間Ａ火山灰を含んでいた。遺物では常滑の甕口縁部破片等が少量検出された。

2　縄文時代の遺構と遺物

（1）　竪穴住居跡

第17号住居跡（第52図）

ＣＣ－28・29グリッドに位置する。第６号溝跡の調査中に周辺から遺物が出土することから更に精査を行ったところ住居跡の存在が認められた。検出された段階で既に床面が出ていた。南東部分で第18号住居跡と重複するが、床面での検出のため新旧関係は明確につかめなかった。平面形は隅丸長方形を呈するものと思われる。主軸方位はＮ－0°－Ｅである。規模は東西方向で6.22m、南北では4.56m残存していた。深さは床面で検出したためほとんど掘り込みは残っていない。ピットは31個検出された。壁柱穴が疎らに廻る。Ｐ24・Ｐ31・Ｐ14などが主柱穴になるものと思われる。西壁に寄った所で第６号溝跡の覆土をはずした段階で埋甕が検出された。埋甕は２個体が切り合っていた。掘り方は小さく埋甕との間隙は殆どない。

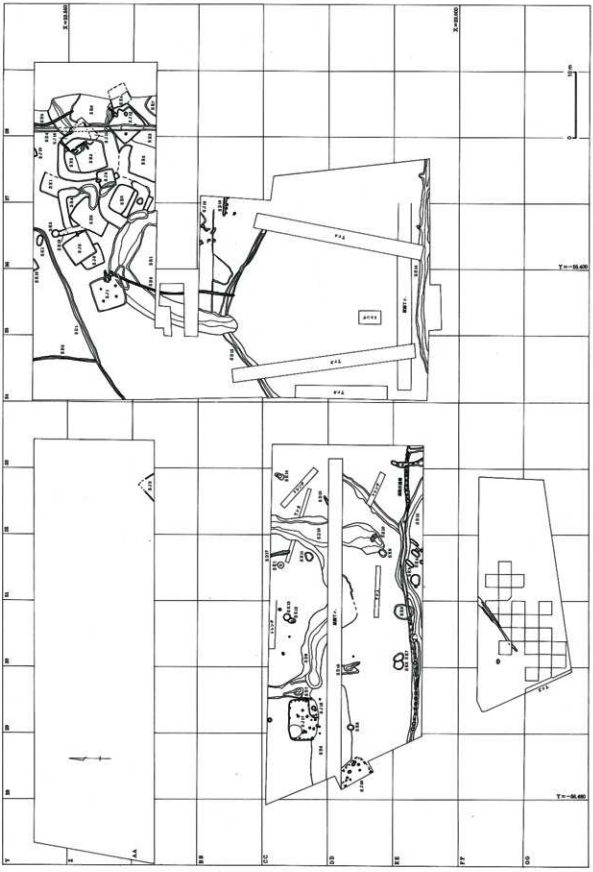
遺物は、埋甕以外は殆ど出土しなかった。１～４は無繊維土器の諸磯式土器と思われるが、器面の荒れが著しく、時期は不明瞭である。縄文は単節ＬＲが施されている。

５～８は繊維を含む黒浜式土器と思われるが、器壁が薄く、縄文は不明である。

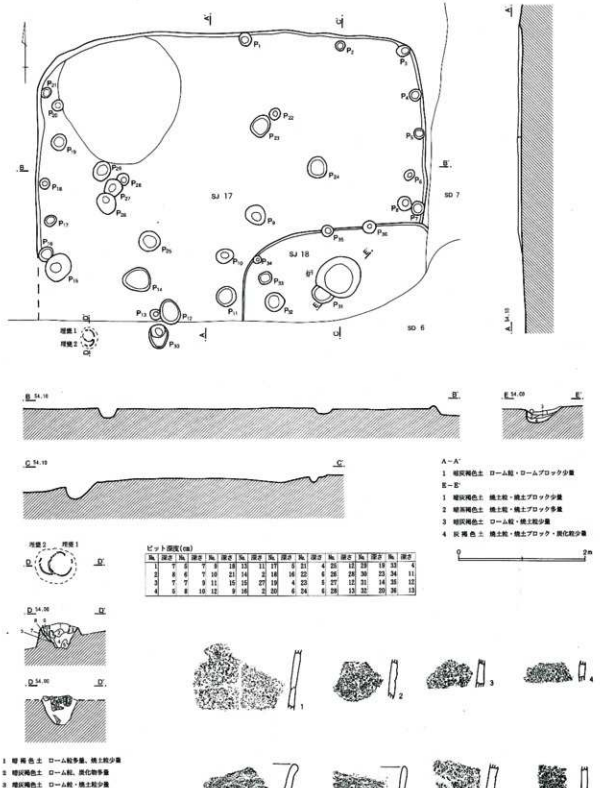
第18号住居跡（第52図）

ＣＣ－29グリッドに位置する。第17号住居跡の調査の途中でうっすらとプランが見えた。第17号住居跡との新旧関係は明確にはつかめなかった。南側は第６号溝跡の調査の際に大部分削平している。東側は第７号溝跡によって切られている。平面形は隅丸方形ないしは隅丸長方形を呈するものと思われる。主軸方位はＮ－3°－Ｗである。規模は東西方向で2.94m、南北では1.44m残存していた。深さは床面で検出したためほとんど掘り込みは残っていない。ピットは５個検出さ

第51図　沖田Ⅲ遺跡全測図



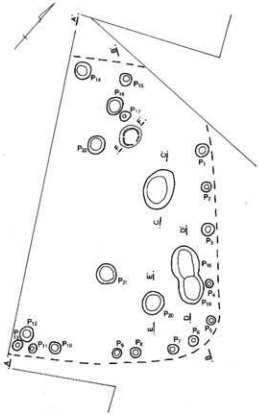
第52図　第17号・第18号住居跡・出土遺物

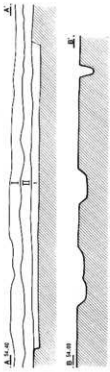


ピット深度(cm)

No.	深さ	No.	深さ	No.	深さ	No.	深さ	No.	深さ	No.	深さ	No.	深さ	No.	深さ	No.	深さ	No.	深さ
1	7	6	7	8	18	13	11	17	6	21	4	25	12	29	19	33	4	
2	8	6	7	10	21	14	2	18	16	22	6	26	28	30	23	34	11	
3	7	7	9	11	15	15	27	19	4	23	5	27	12	31	14	35	12	
4	5	8	10	12	9	16	2	20	6	24	6	28	13	32	20	36	13	

第53図　第20号住居跡・出土遺物





ピット深度(cm)

No.	深さ	No.	深さ	No.	深さ	No.	深さ
1	19	7	5	13	17	18	12
2	23	8	12	14	23	20	10
3	20	9	10	15	22	21	10
4	16	10	21	16	17	22	16
5	11	11	16	17	16		
6	11	12	24	18	8		

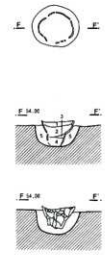
A－A'
I　表　土
II　暗灰色土　旧耕作土
1　暗褐色土　ローム粒・焼土粒少量

C－C'
1　暗 褐 色 土　焼土粒少量
2　焼　土
3　暗茶褐色土　ローム粒、焼土粒少量

D－D'
1　暗 褐 色 土　ローム粒微量、焼土粒多量
2　茶 褐 色 土　ローム粒多量、焼土粒少量
3　暗 褐 色 土　ローム粒・焼土粒少量
4　暗茶褐色土　ローム粒少量

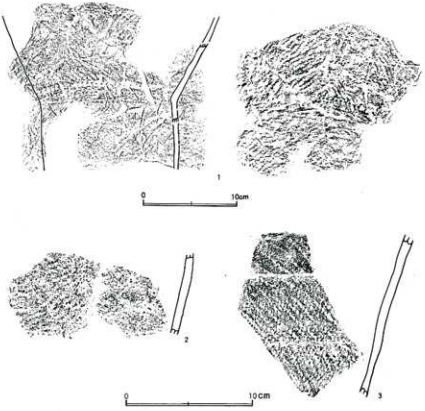
E－E'
1　暗 褐 色 土　焼土・炭化粒多量
2　暗茶褐色土　鉄粒多量

0　　9m

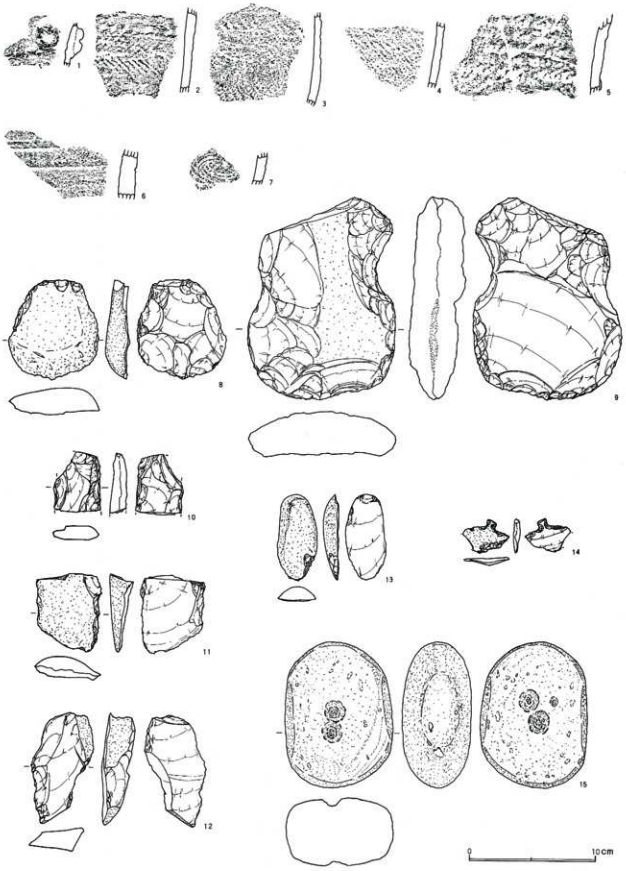


F－F'
1　暗灰褐色土　焼土粒少量
2　灰 褐 色 土　ローム粒少量
3　暗灰褐色土　ローム粒・炭化粒少量
4　暗茶褐色土　焼土粒少量
5　暗灰褐色土　ローム粒少量

0　　1m



第54図　グリッドその他出土遺物



れた。壁柱穴が疎らに廻る。北側壁から50cmの所に地床炉が検出された。直径33cmほどの円形である。覆土は全体に焼土粒を含み最下層は炭化粒も見られ、薄く焼土が検出された。掘り込みは26cmほどである。

遺物は出土しなかった。

第20号住居跡（第53図）

DD－28グリッドに位置する。検出された段階で既に床面が出ていた。西側は調査区外にかかる。第6号溝跡の上面で確認できた。ピットの配列から平面形は台形を呈するものと思われる。主軸方位はN－38°－Wである。規模は長軸で4.7mである。深さは床面で検出したためほとんど掘り込みは残っていないが、調査区の断面で見ると10cm程の立ち上がりを残してそれ以上は削平されている。ピットは22個検出された。壁際に柱穴が廻る。主柱穴はP21・P22などであろうか。地床炉が住居跡東隅部分で検出された。直径35cmほどの円形で、上面はかなり削られていたが、焼土は比較的良い状態で残っていた。掘り込みの深さは10cm程である。北壁寄りに埋甕が検出された。遺物は、埋甕以外は殆ど出土しなかった。

1は胴上半部が屈曲して大きく開く深鉢で、屈曲部が2列の爪形文で区画されている。器面の荒れが著しく、地文縄文は不明瞭であるが、単節縄文による大きな羽状縄文が施文されているものと思われる。繊維を多く含み、前期の黒浜式に比定される。

2はやや薄手の土器で、端部に胴部区画の爪形文が僅かに観察される。地文は単節LRと思われる。繊維を多く含み、黒浜式に比定される。

3は無繊維の諸磯式土器で、単節RLの斜縄文が施文されている。

（2） グリッド出土遺物（第54図）

グリッド出土土器

1は口縁部付近に隆帯の円形貼付文を施し、その下部にも隆帯を巡らせている。器壁が薄く、繊維を多く含んでいる。2は微隆起状の隆線が巡らされ、軽く爪の押圧が施されている様である。あるいは成形痕かもしれない。繊維を多く含み、幅の狭い羽状縄文が施文されているものと思われる。3、4も器壁が薄く、繊維を含み、幅の短い斜縄文が施文される。5は短いループ文が多段に施文されるもので、繊維を多く含む。1～5はその特徴からして、花積下層式の新しいところか、二ツ木式の古い段階に比定されよう。

6は諸磯b式の爪形文土器で、幅の広い爪形文が施文される。7は条線でレンズ状文を施文する、諸磯c式土器と思われる。

グリッド出土石器

8～11は打製石斧である。8は裏面に礫表を残し、主要剥離面側のみに調整剥離が施される。長さ7.8cm、幅7cm、厚さ2.1cm、重さ127gを測る。9は大型の分銅形石斧で、刃部を一部欠損する。長さ15.8cm、幅11.7cm、厚さ3.5cm、重さ913.1gを測る。10は頭部が現存する、11は刃部が現存する短冊形石斧で、10は長さ4.8cm、幅3.6cm、厚さ1.1cm、重さ29.7gを測る。11は長さ6.1cm、幅5.2cm、厚さ1.6cm、重さ54gを測る。

14は摘みの付く横型石匙で、刃部を欠損する。長さ2.6cm、幅3.6cm、厚さ0.6cm、重さ2.9を測る。

15は磨石で、両面に窪みが存在する。長さ11.5cm、幅8.5cm、厚さ5.3cm、重さ771.6gを測る。

12、13は縦長の剥片で、鋭利なエッジを有するが、未使用である。

3　古墳時代前期の遺構と遺物

（1） 方形周溝墓

第1号方形周溝墓（第55・56図）

AA－35・36グリッドを中心に検出された。第1号住居跡・第5号方形周溝墓・第3号溝跡・第13号溝跡に切られている。中央部は緑地保存部分となるため周溝西側の上面を確認するだけにとどめた。南側は谷にかかり低くなるため周溝のプランがうまく追えなかった。全体の形状は長方形気味のプランと思われるが、南側は周溝が明確でなく形がはっきりしない。西側の周溝は緩く弧を描いており北側の周溝も外側が膨らん

第55図　第1号方形周溝墓(1)

ている。周溝内側は直線的である。周溝の断面は、外側の立ちあがりは緩やかであるが内側は外側に比べて急である。底面は西側北半部では浅く平らであるが北側および西側南半部では中央部が深くなる。北および東隅部分で土壙が検出された。北隅のものは周溝底面で検出したものである。東隅のものは周溝の外側に若干はみ出している。方台部は南半分が良くわからないが、北半分はきちんとした方形を呈する。埋葬施設は検出されなかったが、緑地保存部分にある可能性もある。

遺物はまったく出土していない。

第2号方形周溝墓（第57図）

Z－37グリッドを中心に検出された。第3号・第6号方形周溝墓、第8号・第11号・第16号住居跡、第2号竪穴状遺構、第4号溝跡と重複する。第4号溝跡、第8号・第11号・第16号住居跡より古く、第2号竪穴状遺構より新しい。第3号・第6号方形周溝墓との新旧関係はつかめなかった。平面形は、長辺がやや膨らむ長方形である。特に北東隅は隅切状になっているため東辺は大きく膨らんでいる。周溝は北側の幅が狭く、南側は北側のおよそ2倍の幅を持つ。周溝の断面は、外側、内側ともほぼ同じような立ち上がりである。周溝底面は平坦である。方台部は北辺および南辺は直線的であるが、西辺はやや膨らみ東辺は大きく膨らんでいる。埋葬施設は検出されなかった。

遺物は出土しなかった。

第3号方形周溝墓（第58図）

AA－37グリッドを中心に検出された。北側と西側は第2号方形周溝墓と第5号方形周溝墓と重複し、東側は第3号竪穴状遺構と重複する。南側は調査区外に伸びる。第12号住居跡より古く、第3号竪穴状遺構より新しい。第2号・第5号方形周溝墓との新旧関係はつかめなかった。平面形は、長方形と思われる。周溝は東隅が切れているようであるが、上面がかなり削平されており、残存状態が良くないことから続いていた可能性もある。周溝の断面は、重複が激しいため良くわからないが第2号方形周溝墓と同じようであると思われる。周溝底面は平坦である。方台部は直線的である。埋葬施設は検出されなかった。

遺物は出土しなかった。

第4号方形周溝墓（第59図）

Z－36グリッドを中心に検出された。中央部から南側にかけて第5号竪穴状遺構と重複し、東側は第1号竪穴状遺構、西側の周溝の一部を第15号土壙と重複する。第15号土壙より古く、第1号・第5号竪穴状遺構より新しい。平面形は、長方形である。周溝は東側中央が一段浅くなっている。周溝の断面は、外側、内側とも同じような立ち上がりを示す。周溝底面は中央部がやや盛りあがる。方台部は第5号竪穴状遺構といっしょに掘り込んでしまったため南側が明確でない。

遺物は出土しなかった。

第5号方形周溝墓（第60図）

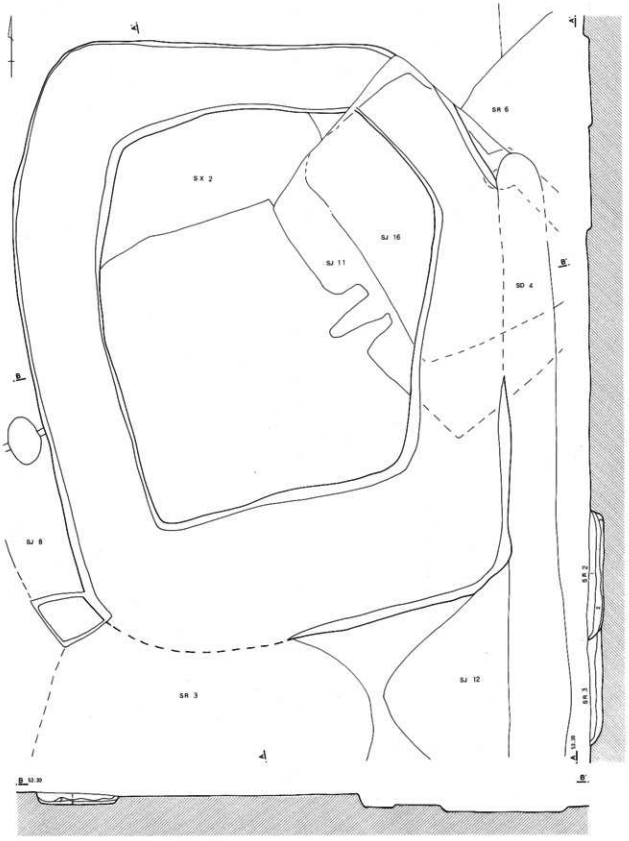
Z－37グリッドを中心に検出された。北側は第8号住居跡と重複し、東側は第3号方形周溝墓と、南側は第1号方形周溝墓と重複する。第8号住居跡より古く、第1号方形周溝墓より新しい。第3号方形周溝墓との新旧関係はつかめなかった。平面形は長方形である。周溝は全周する。北側は外側が膨らんで弧を描いている。周溝の断面は、内側が外側よりわずかに立ち上がりが緩い。周溝底面は平坦であるが東側では中央から南側が一段低くなる。周溝北側に長楕円形の土壙が検出された。土壙は周溝外壁にかかる位置に掘り込まれていた。長軸3.16m、短軸1.25m、深さは周溝底面から8cmである。方台部は東西方向の長方形で南側が幅50cmほどのテラス状になっている。埋葬施設は検出されなかった。

遺物は出土しなかった。

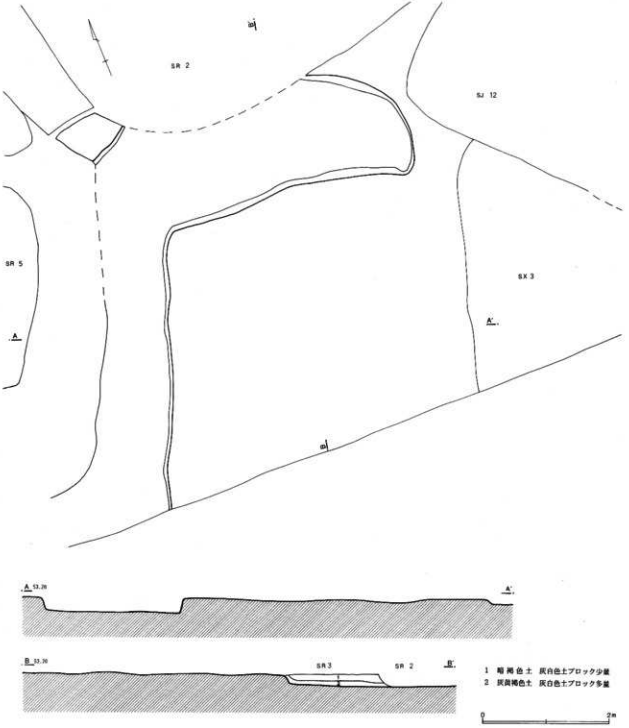
第6号方形周溝墓（第61図）

Z－38グリッドを中心に検出された。東側は土取りによって壊されている。西側は第11号住居跡、第16号住居跡、第2号方形周溝墓、第4号・第5号溝跡と重複し、南側は第12号住居跡、第4号竪穴状遺構、第7号方形周溝墓と重複する。第11号・第12号・第16号住居跡、第4号・第5号溝跡より古く、第4号竪穴状遺

第57図　第２号方形周溝墓



第58図　第３号方形周溝墓



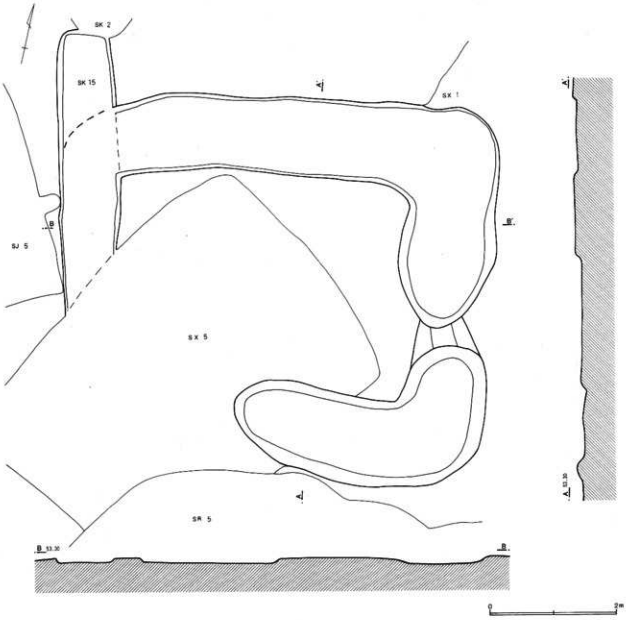
構より新しい。第７号方形周溝墓との新旧関係はつかめなかった。重複が激しく全体の形は不明である。周溝は北側の一部で残っていただけである。周溝外側は大きく膨らんで円を描くようなプランを呈する。内側は直線的で方台部を形成する。周溝の断面は、底面中央部が低く外側に向かって緩やかに立ち上がる。方台部は北辺と南辺の中央部が内側に緩やかに抉れている。埋葬施設は検出されなかった。

遺物は出土しなかった。

第７号方形周溝墓（第62図）

ＡＡ－38グリッドを中心に検出された。東側は土取りによって壊されている。北側は第４号竪穴状遺構と

第59図　第４号方形周溝墓



重複し、西側は第４号溝跡と重複する。第４号溝跡より古く、第４号竪穴状遺構より新しい。南側は調査区外に伸びる。大半が破壊されたり調査区外のため全体の形は不明である。周溝は北側および東側の一部で残っていただけである。北側の周溝は直線的である。幅は北側より東側が広くなるようである。内側はわずかに弧を描いて方台部を形成する。周溝断面は、外側、内側とも同じような立ち上がりを示す。底面はほぼ平坦であるが北側コーナー部では内側が低くなる。方台部は北辺がやや弧を描いているが、全体像は不明である。

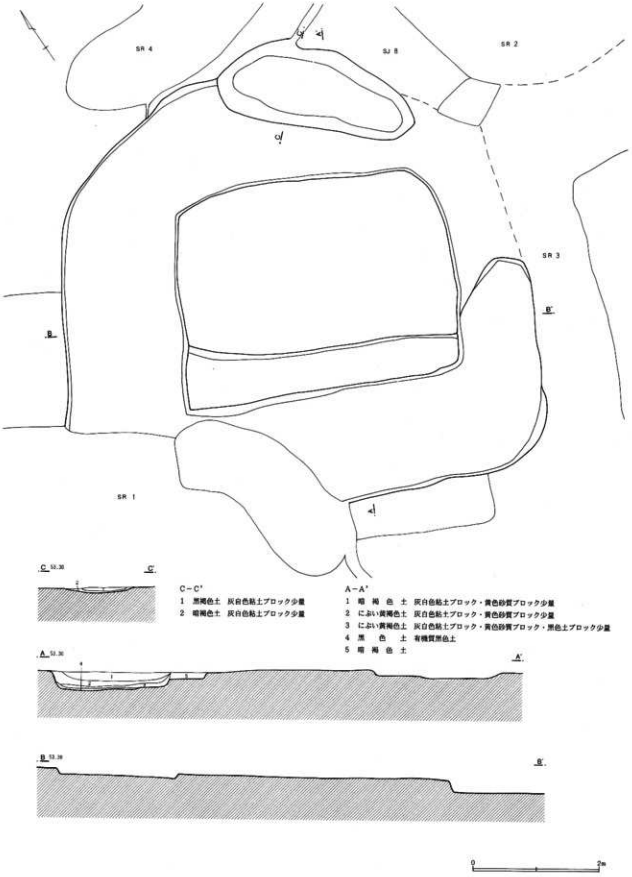
遺物は出土しなかった。

（２）　竪穴状遺構

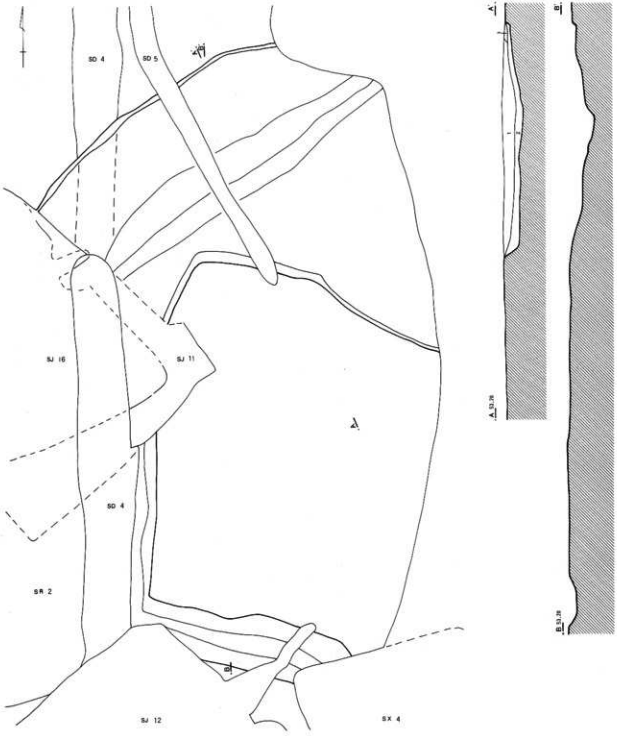
第１号竪穴状遺構（第63図）

Ｙ－37グリッドで検出された。第４号方形周溝墓と重複し、これより古い。南北に長い長方形を呈する。東辺および南辺は消失している。長軸は3.4m、短軸は2.98m残存している。深さは５cmである。壁の立ち上

第60図　第５号方形周溝墓



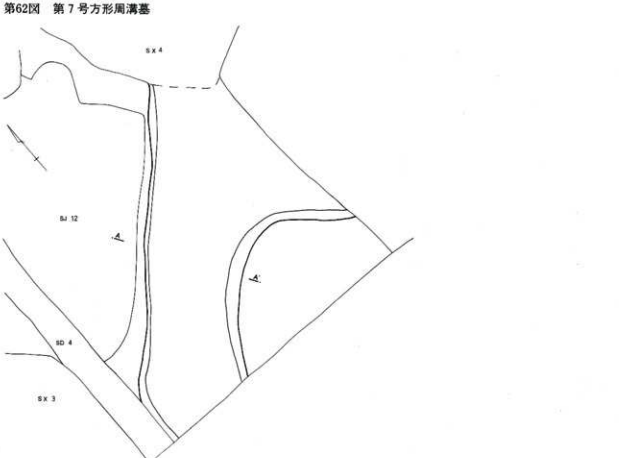
第61図　第６号方形周溝墓



1　暗 褐 色 土　砂質ブロック・黄色砂質ブロック少量
2　にぶい黄褐色土　砂質ブロック多量、黄色砂質ブロック少量
3　にぶい黄褐色土　黄色砂質ブロック多量

0　1　2m

第62図　第７号方形周溝墓



第15表　方形周溝墓計測表

遺　構	形　態	方台部上面	方台部下面	周溝外周	周溝幅	周溝深度	方台部面積	総面積	南北軸偏差
ＳＲ１	コの字	17.20×7.84	17.40×8.50	23.14×14.10	3.40～3.90	0.24	(83.23)	(221.76)	Ｎ－34′－Ｅ
ＳＲ２	全周	6.10×5.04	6.36×5.26	9.54×8.54	1.00～2.24	0.18	28.55	(66.53)	Ｎ－9′－Ｗ
ＳＲ３	一隅切	4.84×(4.21)	5.00×(4.36)	不明	1.40～1.62	0.11	(19.44)	(27.94)	Ｎ－22′－Ｅ
ＳＲ４	全周？	4.54×3.40	4.76×3.60	7.02×6.00	0.96～1.52	1.00	(14.83)	(38.88)	Ｎ－13′－Ｗ
ＳＲ５	全周	4.38×3.34	4.50×3.48	7.50×(6.18)	1.24～1.96	0.28	14.00	(41.76)	Ｎ－29′－Ｅ
ＳＲ６	全周？	5.10×4.50	5.50×4.60	不明	2.62	0.25	(22.03)	(49.36)	Ｎ－16′－Ｅ
ＳＲ７	全周？	不明	不明	不明	1.34～1.60	0.05	(3.24)	(12.85)	Ｎ－42′－Ｅ

がりはわずかしか残っていない。底面は平坦で、焼土、柱穴等は検出されなかった。

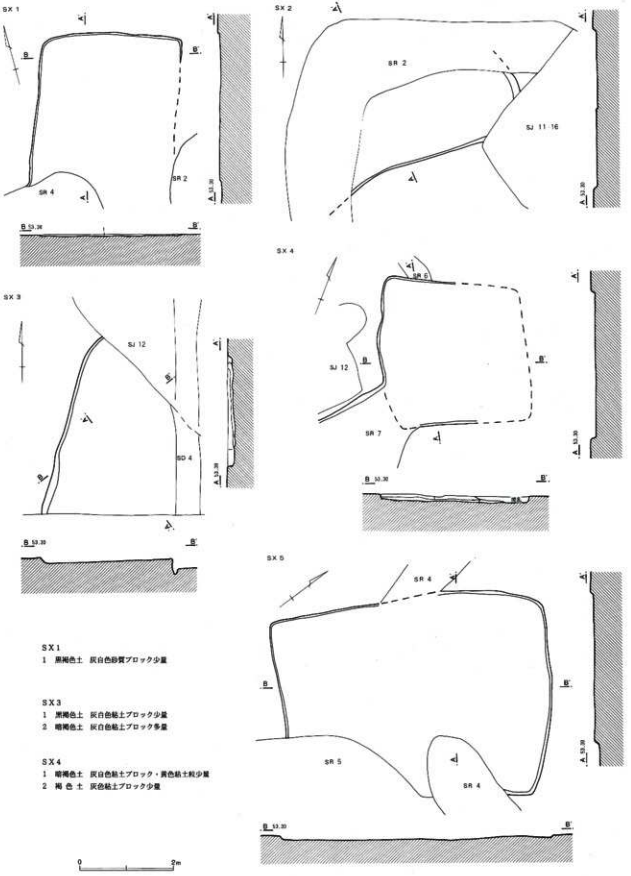
遺物は出土しなかった。

第２号竪穴状遺構（第63図）

Ｚ－37グリッドで検出された。第16号住居跡、第２号方形周溝墓と重複し、これらより古い。第２号方形周溝墓の周溝に大部分を破壊され平面形は良くわからない。残存しているのは3.5m×1.7mだけである。深さは７cmである。壁の立ち上がりはわずかしか残っていない。底面は平坦で、焼土、柱穴等は検出されなかった。

遺物は出土しなかった。

第63図　第1・2・3・4・5号竪穴状遺構



第3号竪穴状遺構（第63図）

ＡＡ－37・38グリッドで検出された。南側は調査区外に伸びる。第12号住居跡、第7号方形周溝墓、第4号溝跡と重複し、これらより古い。これらの遺構によって東側の大部分を破壊されている。残存しているのは3.66m×3.50mだけである。深さは10cmである。壁の立ち上がりはわずかしか残っていない。底面は平坦で、焼土、柱穴等は検出されなかった。

遺物は出土しなかった。

第4号竪穴状遺構（第63図）

Ｚ－38グリッドで検出された。東側は土取りによって破壊されている。第6号・第7号方形周溝墓と重複し、これらより古い。長方形ないしは方形を呈するものと思われる。残存しているのは3.12m×2.98mである。深さは10cmである。壁の立ち上がりはわずかしか残っていない。底面は平坦で、焼土、柱穴等は検出されなかった。

遺物は出土しなかった。

第5号竪穴状遺構（第63図）

Ｚ－36グリッドを中心に検出された。第4号・第5号方形周溝墓と重複し、これらより古い。長方形を呈する。規模は5.72m×4.14mである。深さは10cmである。壁の立ち上がりはわずかしか残っていない。底面は平坦で、焼土、柱穴等は検出されなかった。

遺物は出土しなかった。

4　古墳時代後期の遺構と遺物

（1）　竪穴住居跡

第1号住居跡（第64図）

Ｚ－35グリッドに位置する。第3号溝跡、第1号方形周溝墓と重複する。第1号方形周溝墓より新しい。第3号溝跡との新旧関係はつかめなかった。平面形は方形である。主軸方位はＮ－73°－Ｅである。規模は4.92m×4.86m、深さは0.17mほどである。床面は中央部および竈前面にかけて低い。また、この部分は貼床が顕著である。壁溝はほぼ全周するが竈右側が切れる。壁溝の深さは床面から0.12m程である。柱穴は4個検出された。主柱穴と考えられる。深さはＰ1＝12cm、Ｐ2＝6cm、Ｐ3＝4cm、Ｐ4＝6cmである。貯蔵穴は検出されなかった。竈は東壁やや右寄りに検出された。袖は高さ0.14mほど残っており左袖の長さは0.64mである。燃焼部の規模は、長さ1.0m、幅0.54mである。煙道は燃焼部より一段上がって掘り込まれていた。煙出し部に向かって緩やかに浅くなる。残存長1.0mである。

遺物は竈右袖周辺と住居跡南側にややまとまって出土した。東西隅には編物石がまとまって検出された。出土状況は殆どが床面あるいは床面直上からの出土である。

第3号住居跡（第67図）

ＡＡ－32グリッドに位置する。他の遺構との重複はないが北側のコーナー部分を風倒木によって壊されている。南側は調査区外に伸びる。平面形は方形になるものと思われる。方位は北辺を軸にとるとＮ－50°－Ｅである。検出された規模は風倒木で壊された部分を含む推定値で北辺が3.3m、東辺が2.9mである。深さは12cmほどである。床面は平坦である。壁溝、柱穴等は検出されなかった。

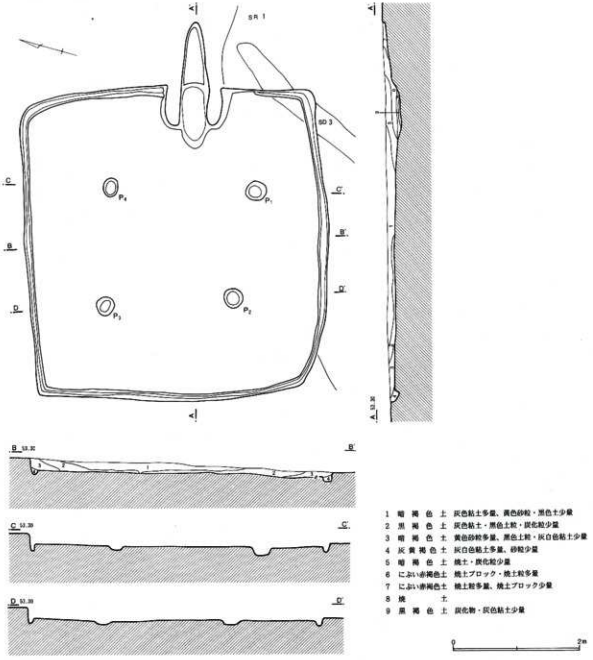
遺物は出土しなかった。

本遺構の性格については、竈は調査区外に存在する可能性もあるが、床面に壁溝などの施設が確認されないこと、遺物の出土がないことなどから、住居跡と考えるより竪穴状遺構のようなものと捉えておいたほうがよいかもしれない。

第5号住居跡（第67図）

Ｚ－36グリッドを中心に位置する。南西部分で第6号住居跡と重複する。第6号住居跡より新しい。東側は第4号方形周溝墓とほとんど接する状態であるが第4号方形周溝墓と重複するまでにはいたっていない。検出した段階で既に床面まで削られた状態であった。平面形は方形である。主軸方位はＮ－60°－Ｅである。

第64図　第１号住居跡



規模は3.94m×4.20m。深さ、床面ともに削平を受けており状態は良くない。壁溝は全周する。壁溝の深さは８cm程残っていた。柱穴、貯蔵穴は検出されなかった。竈下部が東壁右寄りに残存していた。袖、煙道ともに残っていない。

遺物は出土していない。

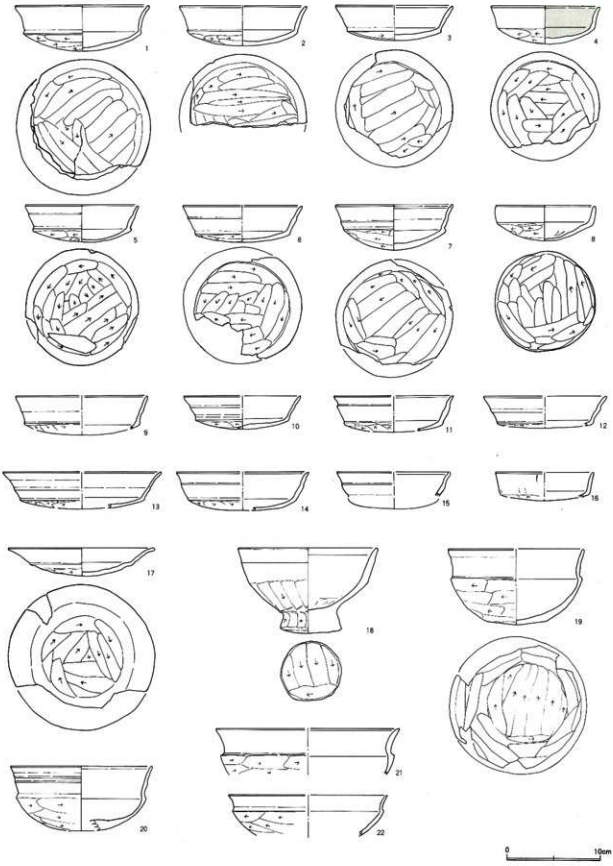
第６号住居跡（第67図）

Z－36グリッドに位置する。北東部分は第５号住居跡と重複し、これより古い。第５号住居跡と同じく検出された段階でかなり削平されていたため壁の立ち上がりはなくなっていた。平面形は方形にである。方位はN－65°－Eである。規模は3.52m×3.36mである。壁溝、柱穴等は検出されなかった。

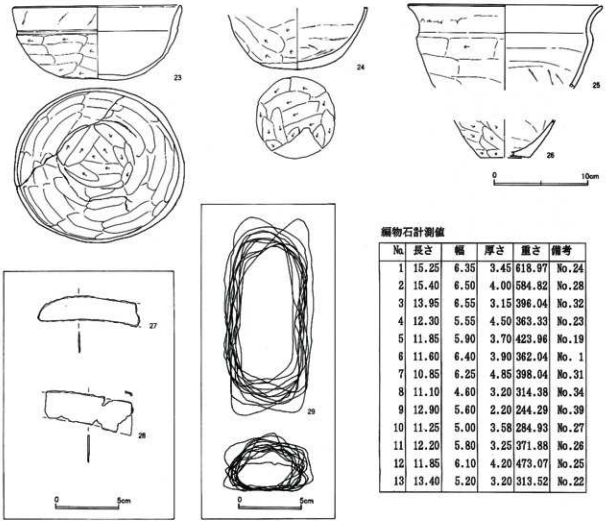
遺物は出土しなかった。

本遺構についても、竈等は第５号住居跡によって壊された可能性もあるが、第３号住居跡と同様な可能性

第65図　第1号住居跡出土遺物(1)



第66図　第１号住居跡出土遺物(2)



編物石計測値

No.	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
1	15.25	6.35	3.45	618.97	No.24
2	15.40	6.50	4.00	584.82	No.28
3	13.95	6.55	3.15	396.04	No.32
4	12.30	5.55	4.50	363.33	No.23
5	11.85	5.90	3.70	423.96	No.19
6	11.60	6.40	3.90	362.04	No. 1
7	10.85	6.25	4.85	398.04	No.31
8	11.10	4.60	3.20	314.38	No.34
9	12.90	5.60	2.20	244.29	No.39
10	11.25	5.00	3.58	284.93	No.27
11	12.20	5.80	3.25	371.88	No.26
12	11.85	6.10	4.20	473.07	No.25
13	13.40	5.20	3.20	313.52	No.22

がある。

第８号住居跡（第68図）

Ｚ－37グリッドに位置する。第２号・第５号方形周溝墓と重複し、これらより新しい。平面形は方形である。主軸方位はＮ－15°－Ｗである。規模は2.70m×2.80m、深さは0.10mである。床面は中央部がやや低くなる。床は暗褐色土、黄褐色土の混合土で貼床されている。壁は西側の一部を除いて直立する。壁溝はほぼ全周するが南西隅でわずかに切れている。壁溝の深さは床面から５cm程である。柱穴、貯蔵穴は検出されなかった。竈は北壁やや左寄りに検出された。袖、煙道は検出できなかった。

遺物は竈右手前に土師器坏が出土した。また、編物石が１個出土しているのみである。

第10号住居跡（第67図）

Ｙ－37グリッドに位置する。他の遺構との重複はない。北側のほとんどは調査区外に伸びるため、ごく一部を検出したのみである。遺構の性格も断定できないがここでは調査時の所見にしたがって住居跡として扱うこととする。検出されたのは南側コーナー部分の1.1m×0.5mだけである。壁の立ち上がりはほぼまっすぐである。深さは20cmほどである。床面は平坦である。壁溝はないようである。

遺物は出土しなかった。

第11号住居跡（第69図）

Ｚ－37グリッドを中心に位置する。第16号住居跡、

第16表　第1号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器坏	14.0	4.8		BEHJ	II	鈍い橙	65	№9
2	土師器坏	(13.4)	4.2		ABEHJ	II	鈍い橙	45	№12
3	土師器坏	(12.4)	3.6		EHJ	II	鈍い橙	60	№2
4	土師器坏	11.6	3.9		ABEHJ	II	鈍い橙	80	№7　内面黒色処理
5	土師器坏	12.0	3.8		BEHJ	III	褐灰	90	№3
6	土師器坏	(12.6)	3.9		ABEHJ	III	鈍い橙	60	№14/№18
7	土師器坏	12.4	4.7		EHJ	II	灰黄褐	80	№11
8	土師器坏	10.5	3.7		EHJ	II	灰黄褐	95	№20
9	土師器坏	(14.0)			BEHJ	II	橙	10	
10	土師器坏	(12.6)	3.5		AEHJ	III	橙	10	№30
11	土師器坏	(12.6)			ABEHJ	II	鈍い橙	15	
12	土師器坏	(13.0)			BEH	II	鈍い黄橙	10	№11
13	土師器坏	(16.8)			BEH	III	橙	10	
14	土師器坏	(14.0)	4.0		AEH	III	鈍い橙	20	
15	土師器坏	(12.0)			EH	II	灰黄褐	10	№12
16	土師器坏	(10.4)			EHJ	II	鈍い橙	10	
17	土師器坏	15.6	3.0		EHJ	II	鈍い橙	80	№38
18	土師器坏	14.6	9.0	6.4	BEHJ	II	鈍い赤褐	95	
19	土師器坏	(14.4)	7.9		BEHJ	II	鈍い橙	60	№15/№18
20	土師器坏	15.0	6.9		ABEHJ	II	橙	70	№5
21	土師器鉢	(19.4)			ABEHJ	II	灰褐	25	№10
22	土師器坏	(16.8)			EH	III	鈍い橙	10	
23	土師器鉢	17.8	7.8		ABEHJ	III	橙	100	№17
24	土師器鉢			8.2	BEHJ	II	橙	70	№12/№16　底部
25	土師器鉢	20.6			BEHJ	II	橙	70	№4/№36　口縁部
26	土師器甕			(5.2)	EHJ	III	灰褐	40	№13
27	不明鉄製品	長さ7.90cm、幅1.80cm						破片	重さ7.42g　先端部　両刃？
28	鎌	長さ6.90cm、幅2.40cm						破片	重さ6.87g　基部

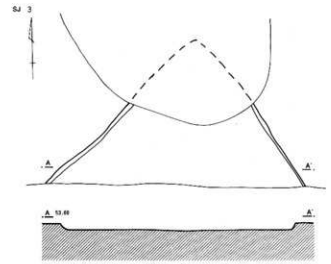
第4号溝、第2号・第6号方形周溝墓と重複する。第4号溝跡より古く、他の遺構より新しい。平面形は横に長い長方形である。竈左側が右側より約60cmほど張り出している。住居跡南半分と西側の一部にかけては第4号溝跡、第6号方形周溝墓と同時に掘ってしまったため壁の立ち上がりがなくなってしまった。主軸方位はN－137°－Wである。規模は4.0m×5.1m、深さは25cmほどである。床面はほぼ平坦である。壁溝は切れぎれで、北隅と東隅部分および竈左側は検出されなかった。壁溝の深さは床面から10cm前後である。柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は竈右側にあたる西隅に検出された。長方形で床面からの深さは13cmである。竈は西壁ほぼ中央に検出された。袖は高さ20cmほど残っており左袖の長さは63cmである。燃焼部は長さ0.94m、幅0.38mで先端は急角度で立ち上がる。煙道が燃焼部より一段上がって掘り込まれるものなら煙道部は残っていないことになる。竈右側に白灰色粘土塊が遺存していた。この粘土は竈を構築する際に用いるものと同じ粘土である。

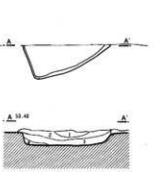
遺物は竈左袖外側に甑、甕などが出土した。

第12号住居跡（第71図）

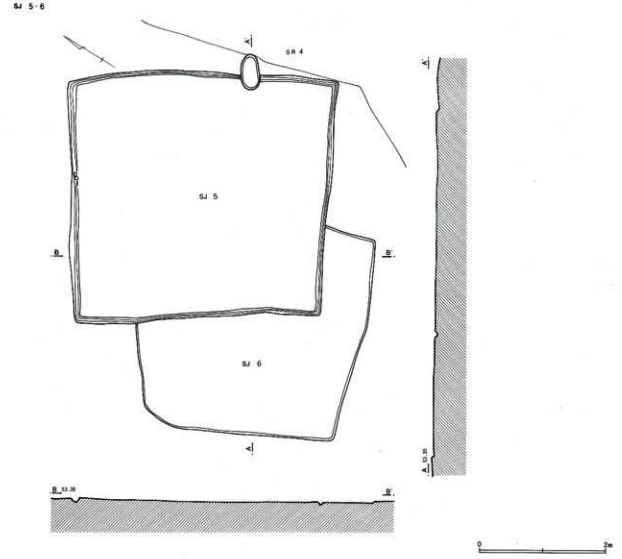
Z－38グリッドを中心に位置する。第4号溝跡、第2号・第6号方形周溝墓、第3号竪穴状遺構と重複する。第4号溝跡より古く、他の遺構より新しい。平面形は方形である。竈左側が右側より約50cmほど張り出している。主軸方位はN－45°－Eである。規模は4.5m×4.5m、深さは残りの良いところで25cmである。床面は住居跡中央部が低い。壁溝は全周する。壁溝の深さは床面から8cmほどである。柱穴は2基しか検出できなかった。P1は深さ6cm、P2は8cmである。住居跡東隅からやや離れた所に検出されたのが貯蔵穴と思われる。一辺55cmほどの方形で深さは85cmである。竈は東壁ほぼ中央に検出された。袖は検出できなかった。燃焼部は長さ0.80m、幅0.56mである。煙道は燃焼部

第67図　第３号・第５号・第６号・第10号住居跡

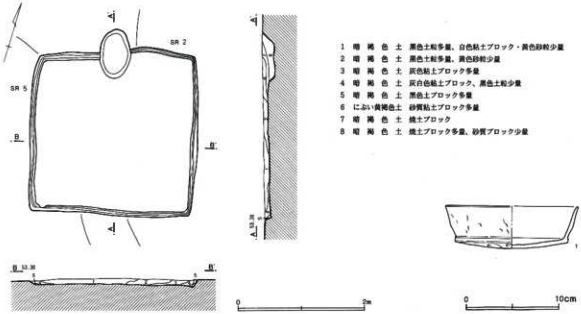




1　にぶい黄褐色土　灰白色粘土ブロック少量
2　にぶい黄褐色土　灰白色粘土ブロック多量
3　褐　色　土　灰白色粘土ブロック少量
4　灰　黄　色　土　灰白色粘土ブロック多量



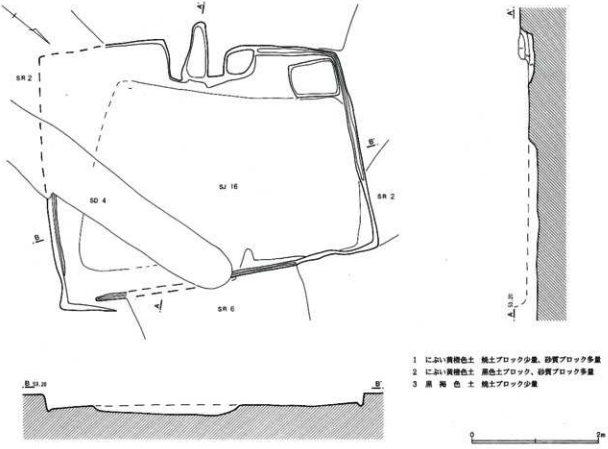
第68図　第８号住居跡・出土遺物



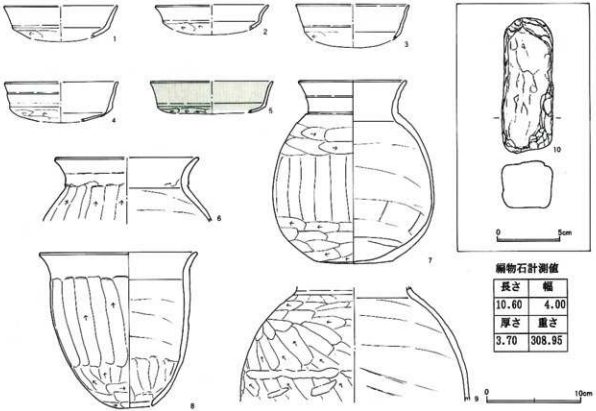
第17表　第８号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存率	備　　考
1	土師器坏	(14.0)	4.4		EHJ	II	鈍い褐	40	№2

第69図　第11号住居跡



第70図　第11号住居跡出土遺物



編物石計測値

長さ	幅
10.60	4.00
厚さ	重さ
3.70	308.95

第18表　第11号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器坏	(12.0)			EHJ	Ⅲ	鈍い橙	10	
2	土師器坏	(12.0)			EHJ	Ⅲ	鈍い橙	10	
3	土師器坏	(12.0)			EHJ	Ⅲ	鈍い橙	10	
4	土師器坏	(12.0)			EHJ	Ⅲ	鈍い橙	10	
5	土師器坏	(13.0)			BEHJ	Ⅲ	褐灰	10	黒色処理
6	土師器甕	(15.5)			EHJ	Ⅱ	鈍い橙	80	№2
7	土師器小型甕	11.3	19.3	8.2	BEHJ	Ⅱ	橙	75	№1
8	土師器甑	16.9	16.4	3.4	ABEHJ	Ⅱ	褐灰	90	№3
9	土師器甕				ABEHJ	Ⅱ	橙	20	

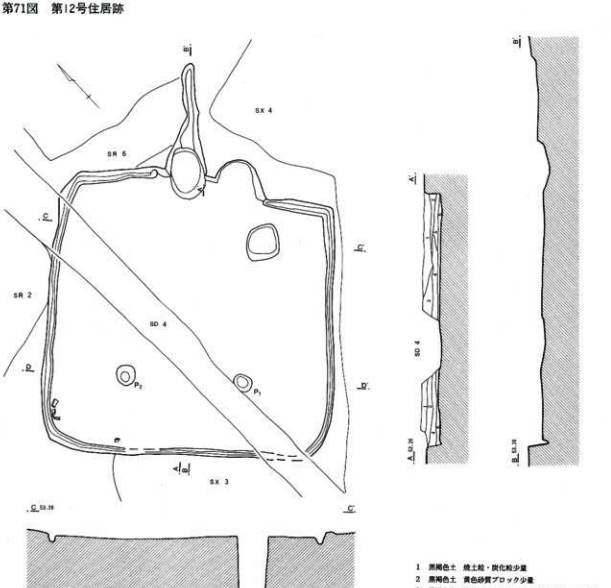
より一段上がって掘り込まれていた。長さは1.35mである。竈右側に半円形に張り出した部分が見られる。住居跡との重複関係は明確に確認できなかったが、この部分の底面の高さが住居跡床面とほぼ同じであること、底面の高さが同じであるのに壁溝がこの部分で止まっていることなどから、この張り出しは住居跡に伴う可能性もある。

遺物は覆土を中心として、主に土師器坏類が出土した。また、須恵器坏、灰釉陶器碗の破片が混入していた。

第16号住居跡（第73図）

Z－37グリッドを中心に位置する。第11号住居跡の床面の調査時に検出された。第11号住居跡、第4号溝跡、第2号・第6号方形周溝墓と重複する。第4号溝跡、第11号住居跡より古く、他の遺構より新しい。平面形は横長の長方形である。主軸方位はN－54°－Eである。規模は2.6m×4.5m、深さは残りの良い西壁際で15cmである。他の部分は第11号住居跡に壊されて立

第71図　第12号住居跡



ち上がりはない。

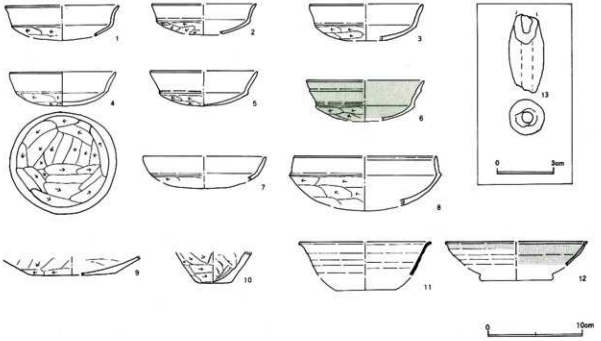
床面はほぼ平坦である。壁溝は残っている部分の深さが2cmと浅く、切れている部分についても本来廻っていた可能性がある。柱穴、貯蔵穴は検出されなかった。竈は東壁やや左寄りに検出された。袖は高さ10cmほど残っていたが残存状態は良くない。燃焼部は長さ0.6m、幅0.28mである。煙道はなかった。

遺物は少ないが、竈周辺と住居跡西壁際から土師器坏等が出土した。

第19号住居跡（第74図）

ＢＢ－36グリッドを中心に位置する。北側の大半が調査区外である。南側のコーナー部分が検出された。深さは20cmである。壁は垂直に立ち上がる。壁溝は幅15cmほどで、深さは6cmである。柱穴等の施設は検出

第72図　第12号住居跡出土遺物



第19表　第12号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器坏	(12.0)			HJ	Ⅲ	橙	15	
2	土師器坏	(11.0)			AHJ	Ⅲ	橙	25	
3	土師器坏	(12.0)	3.9		HJ	Ⅲ	橙	20	
4	土師器坏	11.2	3.6		AEHJ	Ⅱ	橙	100	Na1
5	土師器坏	(11.4)	3.6		EHJ	Ⅱ	鈍い橙	20	
6	土師器坏	(12.4)			BDEHJ	Ⅱ	褐灰	40	内外面黒色処理
7	土師器坏	(13.0)			EH	Ⅲ	鈍い橙	10	
8	土師器坏	(15.0)			BEHJ	Ⅱ	鈍い褐	30	
9	土師器甕			(9.0)	EHJ	Ⅲ	橙	40	
10	土師器甕			(3.8)	BEHJ	Ⅱ	鈍い橙	40	
11	須恵器坏	(14.0)			HJ	Ⅰ	灰	10	
12	灰釉陶器碗	(15.0)			H	Ⅰ	灰白	10	釉：オリーブ灰色
13	土錘	長さ(4.1)	厚さ1.85	孔径0.60	BEHJ	Ⅲ	黒褐		重さ：11.97ｇ

された範囲の中では見当たらなかった。検出範囲が狭いにもかかわらず、炭化材が検出されていることから火災住居と思われる。

遺物は床面に近いところから土師器片が少量出土している。

(2)　溝跡

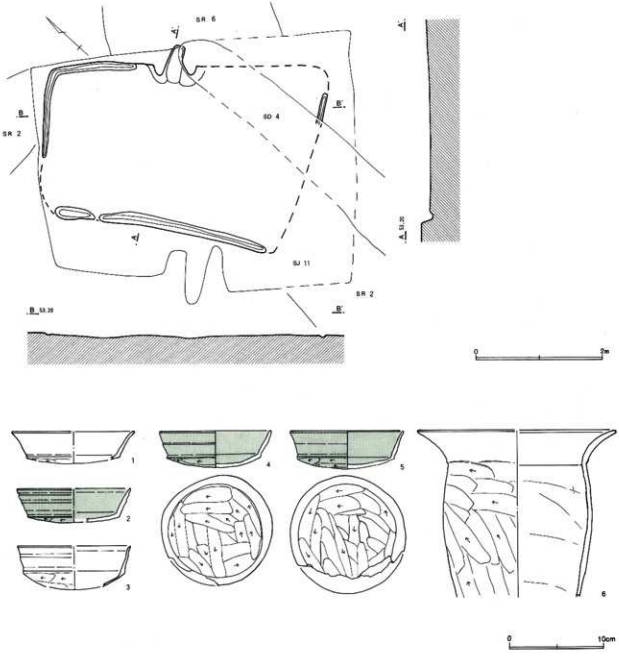
溝跡は15条検出された。これらのうち時期の推定できるものは約半数である。残りの溝については一括して後述することとする。

第1号溝跡（第75図）

Y－36グリッドからZ－34グリッドにかけて検出された。Z－34グリッドで第2号溝跡が接続しているが、他の遺構との重複はない。南西から北東方向へ伸びる溝である。両端とも調査区外へ伸びる。北東側は調査区外へ出る手前で北に方向を変えている。検出された長さは31m、幅は30～60cmである。深さは南西部では5cm、北東部では20cmほどである。底面はあまり凹凸は見られない。南西から北東に向かって20cmほど下がっている。

遺物は土師器細片が少量出土しているが図示できる

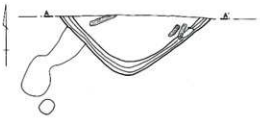
第73図　第16号住居跡・出土遺物



第20表　第16号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器坏	(13.0)			ABEHJ	II	鈍い橙	10	
2	土師器坏	(12.0)	3.5		BEHJ	II	褐灰	30	内外面黒色処理　No2/4
3	土師器坏	(12.0)			BEHJ	II	鈍い橙	30	
4	土師器坏	11.8	3.8		BEHJ	II	褐灰	95	内外面黒色処理　No1
5	土師器坏	12.0	4.0		BEHJ	II	灰褐	85	黒色処理　No2/No4
6	土師器甕	(21.0)			BDEHJ	II	灰褐	45	No4

第74図　第19号住居跡・出土遺物



編物石計測値

長さ	幅	厚さ	重さ
12.70	5.05	3.40	331.28

第21表　第19号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器坏	10.3	5.6		ABEHJ	II	橙	85	
2	土師器甕	(20.4)			BDEHJ	II	鈍い褐	45	

ものはない。

第2号溝跡（第75図）

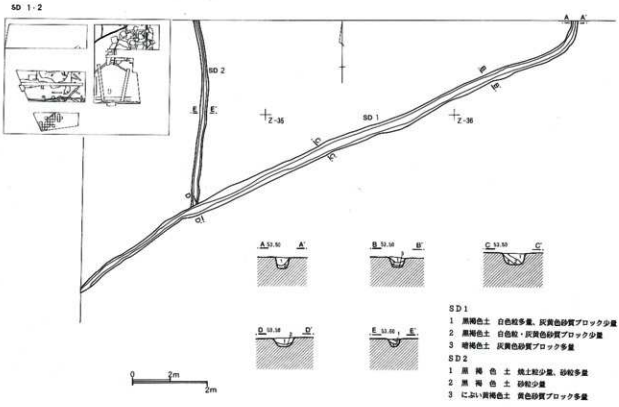
Y－34グリッドからZ－34グリッドにかけて検出された。南北方向へ伸びる溝である。南は第1号溝跡と接続している。北側は調査区外へ伸びる。他の遺構との重複はない。検出された長さは9.7m、幅は20～37cmである。深さは15cmほどである。底面の傾斜は殆ど見られない。

遺物は出土していない。

第3号溝跡（第76図）

Z－35グリッドからBB－35グリッドにかけて検出された。南北方向へ伸びる溝である。北側は第1号住居跡、第1号方形周溝墓と重複し消失している。第1号方形周溝墓より新しいが、第1号住居跡との新旧関係はつかめなかった。南側は第13号溝跡と重複し消失している。検出された長さは21m、幅は20～38cmである。深さは20cm～30cmほどである。底面の高さは北側ではあまり変わらないが南側では地形に沿って低く

第75図　溝跡(1)



なる。

遺物は、第1号住居跡と重複する周辺で土師器坏、甕などが出土しているが、住居跡の遺物が混入している可能性がある。中央部では土師器甕が単独で出土している。

第4号溝跡（第76図）

Y－38グリッドからAA－38グリッドにかけて検出された。南北方向へ伸びる溝である。両端とも調査区外へ伸びる。第11号・第12号・第16号住居跡、第6号・第7号方形周溝墓、第3号竪穴状遺構と重複し、これら全ての遺構より新しい。検出された長さは18.6m、幅は66～98cmである。深さは20cm～25cmである。底面はほぼ同じ高さである。

遺物は土師器坏、甕片が少量出土している。図示できたのは坏2点である。

第5号溝跡（第76図）

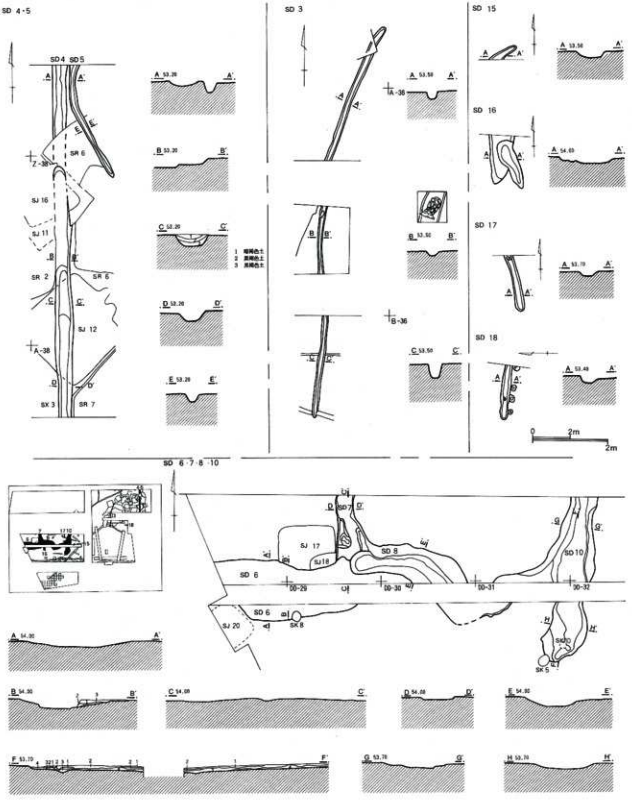
Y－38グリッドからZ－38グリッドにかけて検出された。北から南東方向へやや湾曲して伸びている。第6号方形周溝墓と重複しこれより新しい。南端は調査区内で消失する。北側は調査区外へ伸びている。検出された長さは5.8m、幅は24～36cmである。深さは12cm～30cmである。底面は北から南に向かって10cmほど下がっている。

遺物は土師器細片が少量出土している。図示できたのは3点である。

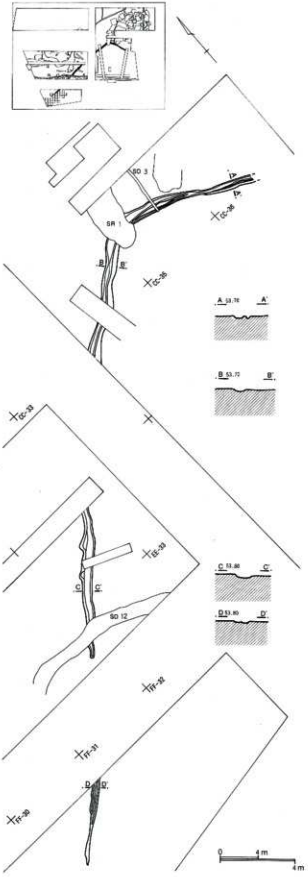
第6・7・8・10・16号溝跡（第76図）

本遺跡で検出された溝の中では規模が大きく蛇行が激しい。堆積土は砂混じりの暗灰色粘質土であり、人為的に掘られた溝というよりは一連の自然流路と捉えたほうが良いでと思われるため、一括して記載する。第6号溝跡は東西方向に伸びている。西側は調査区外である。第7号・第8号・第10号溝跡は全体として屈曲しながら「コ」字形に廻っている。北側は調査区外である。断面は浅い皿状の部分が多く、立ち上がりは極

第76図　溝跡(2)


SD 4・5
SD 3
SD 15
SD 16
SD 17
SD 18
SD 6・7・8・10
SD 4 SD 5
SR 6
SJ 16
SJ 11
SR 2
SR 6
SJ 12
SR 3
SR 7
SJ 17
SJ18
SD 8
SD 6
SD 10
SD 6
SR 8
SJ 20
SR 9
SR 5
1 暗褐色土
2 黒褐色土
3 黒褐色土
B－B'
1 炭褐色土
2 黒炭色土
3 暗炭褐色土
F－F'
1 炭炭褐色土
2 炭褐色土
3 黒炭色土
4 暗黄炭色土
2m
4m

第77図　溝跡(3)



めて緩やかで、他の溝のように壁がしっかり立つようなものではない。時期については第６号溝跡は第20号住居跡に切られていることから、既に一部は縄文時代に埋まっていたことが知られる。しかし、一方では第７号・第８号溝跡部分から管玉、須恵器片などが出土しており、少なくとも古代までは埋まっていなかったことが窺える。流路や流れの幅を変えながら存続していたか、あるいは第６号溝跡と第７号・第８号溝跡の部分で重複があったのかもしれない。調査時に第７号溝跡と第６号溝跡の新旧関係を確認する目的で土層観察を行ったが、堆積土の厚さが十分でなく明確に新旧関係を捉えるにはいたらなかった。埋没時期については、第10号溝跡とした部分の南端で土壙墓に切られているのが手がかりになる。この土壙墓は浅間Ａ火山灰とみられる白色粒子を上層に多量に含んでいた。

遺物は第７号・第８号溝跡部分から管玉、須恵器片が少量出土しているだけである。

第13号溝跡（第77図）

ＣＣ－36グリッドからＦＦ－30グリッドにかけて検出された。南西から北東に向かいＢＢ－35グリッドで直角に向きを変え、南東方向へ向かう。残りが浅いため、両端および途中で所々消失している。道路状遺構、第12号溝跡、第３号溝跡、第１号方形周溝墓と重複する。道路状遺構、第12号溝跡より古く、第１号方形周溝墓より新しい。第３号溝跡との新旧関係はつかめなかった。検出された長さは41.5m、幅は36～120cmである。深さは５cm～10cmである。底面は北東から南西に向かって20cmほど下がっている。

遺物は出土していない。

第15号溝跡（第76図）

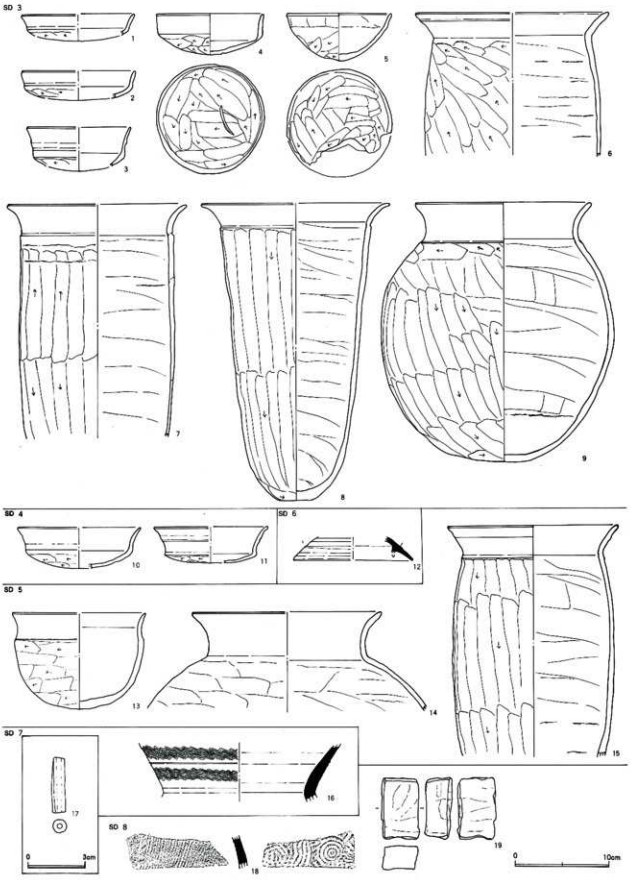
ＣＣ－32で検出された。南西から北東方向の溝である。試掘トレンチで南側は消失している。重複はない。検出された長さは1.5m、幅は35～40cmである。深さは15cmである。

遺物は出土しなかった。

第17号溝跡（第76図）

ＣＣ－31グリッドで検出された。ほぼ南北方向であ

第78図　溝跡出土遺物



る。北側は調査区外に伸びる。南端は調査区内で消失する。重複はない。検出された長さは3.0m、幅は40～50cmである。深さは10cmである。底面は検出された範囲ではほぼ水平である。

遺物は出土していない。

第18号溝跡（第76図）

ＢＢ－36・37グリッドで検出された。東西方向の溝である。西端は調査区内で消失する。東側は調査区外へ伸びている。南側にピットが並列しているが溝に伴うものかわからない。検出された長さは2.8m、幅は40～45cmである。深さは10cm前後である。

遺物は出土しなかった。

第22表　溝跡出土遺物観察表(1)

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存率	備　　考
1	土師器坏	(12.0)			H	Ⅲ	橙	10	SD3
2	土師器坏	(12.0)			DEH	Ⅱ	鈍い橙	10	SD3
3	土師器坏	(11.0)			ABEHJ	Ⅱ	鈍い橙	10	SD3
4	土師器坏	11.4	4.2		ABEHJ	Ⅱ	鈍い橙	90	SD3
5	土師器坏	11.0	4.9		ABEHJ	Ⅱ	鈍い橙	65	SD3　No1
6	土師器甕	(20.4)			DEHJ	Ⅲ	鈍い橙	40	SD3　No1
7	土師器甕	(19.0)			BEHJ	Ⅱ	鈍い赤褐	40	SD3
8	土師器甕	(20.0)	31.2	3.4	BEHJ	Ⅱ	鈍い赤褐	30	SD3
9	土師器甕	18.6	27.2	8.4	ABEHJ	Ⅱ	橙	90	SD3
10	土師器坏	(13.0)	4.2		DEHJ	Ⅱ	鈍い褐	50	SD4
11	土師器坏	(12.0)	3.8		BEHJ	Ⅱ	鈍い橙	15	SD4
12	須恵器蓋	(12.6)			EH	Ⅰ	褐灰	10	SD6
13	土師器小型甕	(14.0)	10.1		AEH	Ⅱ	橙	30	SD5
14	土師器甕	(20.0)			BEHJ	Ⅲ	鈍い橙	20	SD5
15	土師器甕	18.0			BDEHJ	Ⅱ	鈍い褐	70	SD5
16	須恵器甕				BEFHJ	Ⅰ	灰	10	SD7　No1/SD7・8
17	管玉	長さ2.95cm、径0.70cm、孔径0.25cm					灰オリーブ	100	SD7・8　重さ2.76g
18	須恵器甕				EHJ	Ⅰ	灰	破片	SD8　No1
19	砥石	6.50	3.80	2.50	136.63				SD7・8

5　平安時代の遺構と遺物

（1）　井戸跡

第１号井戸跡（第79図）

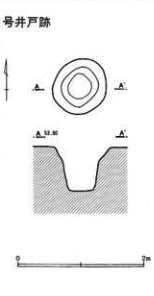
ＣＣ－31グリッドで検出された。第17号溝跡の西側１ｍの位置にあたる。上面は楕円形で下方は円形である。規模は、検出面では0.9m×0.8m、底面では直径３５cmほどである。深さは0.7mである。

遺物は出土していない。

（2）　道路状遺構（第80図）

ＥＥ－28グリッドからＥＥ－33グリッドにかけて検出された。調査時には第９号溝跡と呼称したものである。第12号溝跡、第13号溝跡、第９号土壙と重複し、これらより新しい。東西方向へ伸びる。西側は調査区外へ伸びる。東側は現道下に入るが東隣の調査区では検出できなかった。覆土は暗灰色の粘質土で硬くしまっていた。底面は中央部を除いて皿状のピットが連

第79図　第１号井戸跡



続する。ピットは直径30cmの円形から70cm×45cmくらいの不整楕円形で、深さは5cm～10cm程である。検出された長さは約45mである。幅は1mほどであるが東側は検出面が下がっているため約50cmである。EE－33グリッドではこれに直交する形で南北方向に伸びる。長さは4.7mほど検出された。南は調査区外に伸びる。北は調査区内で消失している。

遺物は土錘が1点出土しているほかは土師器、須恵器甕片などが10点出土しているだけである。これらの遺物については特に細かく磨滅しているということはなく、重複している第14号溝跡の遺物の可能性もある。

（3） 溝跡

第12・14号溝跡（第81図）

EE－28グリッドからEE－37グリッドにかけて検出された。調査時には調査区の都合で別の遺構番号を付したが、一連の溝と考えられる。調査区際をやや蛇行しながら東西方向に伸びる。東西両端とも調査区外に伸びる。道路状遺構、第3号土壙、第13号溝跡と重複している。前2者より古く後者より新しい。特に西側の調査区では殆どが道路状遺構の下に重複している。検出された長さは、西側で約40m、東側で約33mであるが、東西両端まで取ると約89mになる。幅は、1.4mから2mである。深さは、12cmから深い所では90cmほどの部分もあるが平均40cmほどである。底面の高さは西から東に向かって約40cmほど下がっている。

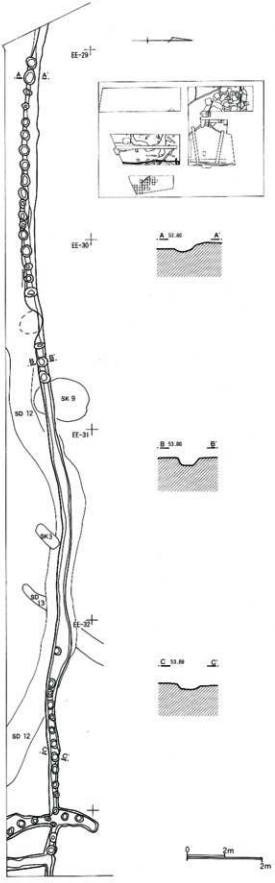
遺物は灰釉陶器碗、須恵器高台碗、土師器坏などが出土している。

（4） 土壙

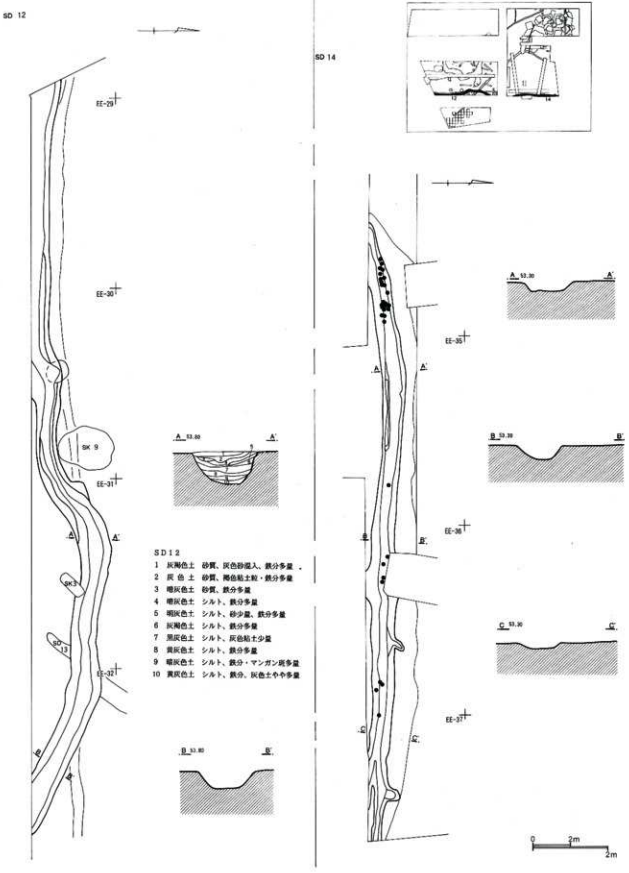
土壙は全部で16基検出されている。遺物が出土しているのは第5号土壙だけである。第5号土壙については既に記述している。他の土壙についてはまったく遺物は出土していない。他の遺構と重複のあるものについてはそれによって相対的な前後関係を類推することはできるが明確な時期決定は困難である。

本来ならこれらの時期の特定できない遺構については、別に項を設けて記述すべきであろうが、便宜上ここに一括して報告する。

第80図　道路状遺構



第81図　第12号・第14号溝跡



SD12

1　灰褐色土　砂質、灰色砂混入、鉄分多量

2　灰 色 土　砂質、褐色粘土粒・鉄分多量

3　暗灰色土　砂質、鉄分多量

4　暗灰色土　シルト、鉄分多量

5　明灰色土　シルト、砂少量、鉄分多量

6　灰褐色土　シルト、鉄分多量

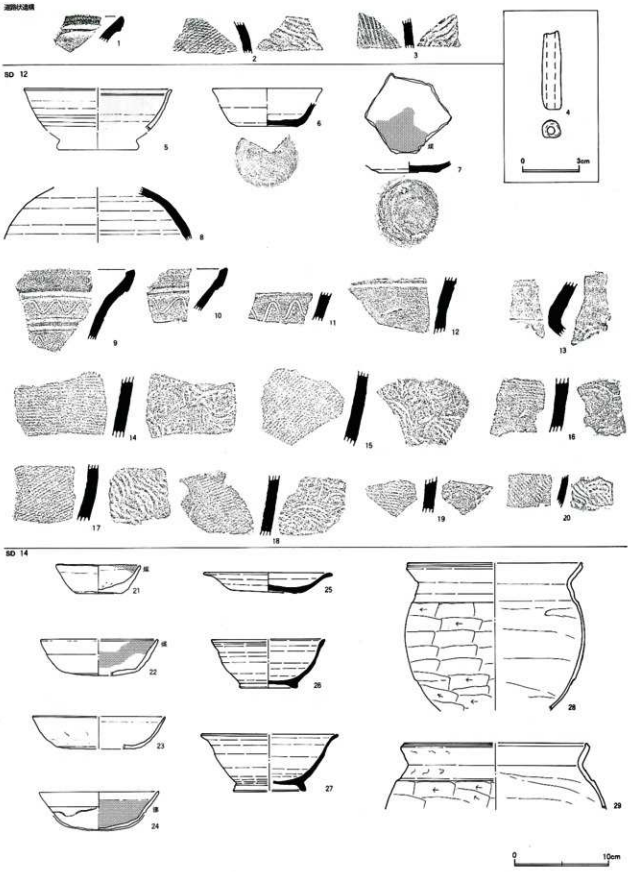
7　黒灰色土　シルト、灰色粘土少量

8　黄灰色土　シルト、鉄分多量

9　暗灰色土　シルト、鉄分・マンガン斑多量

10　黄灰色土　シルト、鉄分、灰色土やや多量

第82図　道路状遺構・溝跡出土遺物



第23表　溝跡出土遺物観察表(2)

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存率	備　　考
1	須恵器甕				BEHJ	I	灰	破片	道路状遺構
2	須恵器甕				BEHJ	I	灰	破片	道路状遺構　No.3
3	須恵器甕				BEHJ	I	灰	破片	道路状遺構
4	土錘	長さ4.1	径1.0	孔径0.45	EHJ	II	鈍い橙	100	道路状遺構　重さ:4.25g
5	灰釉陶器碗	(15.6)			EH	I	灰白	30	SD12
6	須恵器坏				EHJ	I	灰	60	SD12
7	須恵器坏			6.4	EHJ	I	黄灰	100	SD12　内面黒色付着物
8	須恵器長頸瓶				EHJ	I	灰	10	SD12
9	須恵器甕				EHJ	I	灰	破片	SD12　口縁部
10	須恵器甕				EHJ	I	灰	破片	SD12　口縁部
11	須恵器甕				EHJ	I	灰	破片	SD12
12	須恵器甕				EHJ	I	灰	破片	SD12
13	須恵器甕				EHJ	I	灰	破片	SD12
14	須恵器甕				EHJ	I	灰	破片	SD12
15	須恵器甕				EHJ	I	灰	破片	SD12
16	須恵器甕				EHJ	I	灰	破片	SD12
17	須恵器甕				EHJ	I	灰	破片	SD12
18	須恵器甕				EHJ	I	灰	破片	SD12
19	須恵器甕				EHJ	I	灰	破片	SD12
20	須恵器甕				EHJ	I	灰	破片	SD12
21	土師器坏	9.0	3.0	4.8	BEFH	III	橙	95	No.3　口縁端部黒色付着物
22	土師器坏	(12.2)	3.8	(5.8)	BEH	II	橙	40	No.9　黒色付着物
23	土師器坏	(14.0)	3.4	(9.0)	BEH	II	橙	10	No.5
24	土師器坏	(12.6)	4.0		EH	II	鈍い橙	70	No.8　黒色付着物
25	須恵器皿	13.6	2.1	6.2	EHJ	II	灰褐	80	No.9/No.25
26	須恵器高台付椀	(12.0)	5.1	(6.2)	EHJ	II	灰	30	No.30
27	須恵器高台付椀	(14.6)	6.0	(7.6)	BEHJ	II	灰白	40	No.6
28	土師器甕	(18.4)			EHJ	II	鈍い橙	20	No.21/No.20?
29	土師器甕	(18.6)			EHJ	II	橙	15	No.10/No.11?

第1号土壙（第84図）

Y－36グリッドに位置する。第1号溝跡と上端をわずかに接している。平面形は楕円形である。底面は西側が東側よりやや高くなっている。大きさは1.72m×1.00m、深さは8cmである。

第2号土壙（第84図）

Y－36グリッドに位置する。第15号土壙と南側の上端をわずかに重複するが新旧関係はつかめなかった。平面形は円形である。底面は西側から東側に向かって低くなる。直径1.2m、深さは8cmである。

第3号土壙（第84図）

EE－31グリッドに位置する。第12号溝跡と重複する。平面形は隅丸長方形である。底面は西側が東側よりやや高くなっている。大きさは1.50m×0.6m、深さは24cmである。

第4号土壙（第84図）

EE－31グリッドに位置する。中央部東側をピットに切られている。平面形は隅丸長方形である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦である。大きさは1.46m×0.74m、深さは34cmである。

第5号土壙（第84図）

DD－31グリッドに位置する。平面形は楕円形である。底面は中央部が低い皿状である。大きさは1.3m×1m、深さは58cmである。

第6号土壙（第84図）

EE－29・30グリッドに位置する。第7号土壙と重複する。平面形は不整円形である。底面は中央部が低い皿状である。直径約1.3m、深さは10cmである。

第7号土壙（第84図）

EE－30グリッドに位置する。第6号土壙と重複する。平面形は不整楕円形である。底面は中央部が低い皿状を呈する。

第8号土壙（第84図）

DD－29グリッドに位置する。第6号溝跡と重複する。これより新しい。平面形は楕円形である。底面は平坦である。大きさは1.10×0.9m、深さは6cmである。

第9号土壙（第84図）

EE－30グリッドに位置する。平面形は楕円形である。底面は平坦であるが南に向かって下がる。第9号溝跡と重複し、これより古い。大きさは2.96m×2.28m、深さは36cmである。

第11号土壙（第84図）

CC－31グリッドに位置する。平面形は不整形である。底面は中央部が低くやや凹凸がある。大きさは1.44m×1.14m、深さは22cmである。

第12号土壙（第84図）

CC－30グリッドに位置する。第13号土壙と重複する。平面形は楕円形である。底面は南側がピット状に深くなる。大きさは1.20m×0.76m、深さは18cmである。

第13号土壙（第84図）

CC－30グリッドに位置する。第12号土壙と重複し、これより新しい。平面形は不整円形である。底面は平坦である。大きさは1.08m×1.00m、深さは8cmである。

第14号土壙（第85図）

CC－32グリッドに位置する。平面形は不整形である。底面北側に浅いピット状の掘り込みがあり南から北に向かって緩やかに深くなる。長さ1.42m、幅は南側の広いところで約1m、北側では50cmと狭くなる。深さは50cmである。

遺物は須恵器甕の胴部破片と礫が出土している。

第15号土壙（第85図）

Y－36グリッドに位置する。第4号方形周溝墓と重複する。平面形は長方形になるものと思われる。底面は平坦である。長さは1.62m残存している。幅は0.92m、深さは10cmである。

第16号土壙（第85図）

Y－35・36グリッドに位置する。北側が調査区外に出る。平面形は長方形になるものと思われる。底面は平坦である。長さは1.5m検出できた。幅は0.9mである。深さは40cmである。

6　中近世の遺構と遺物

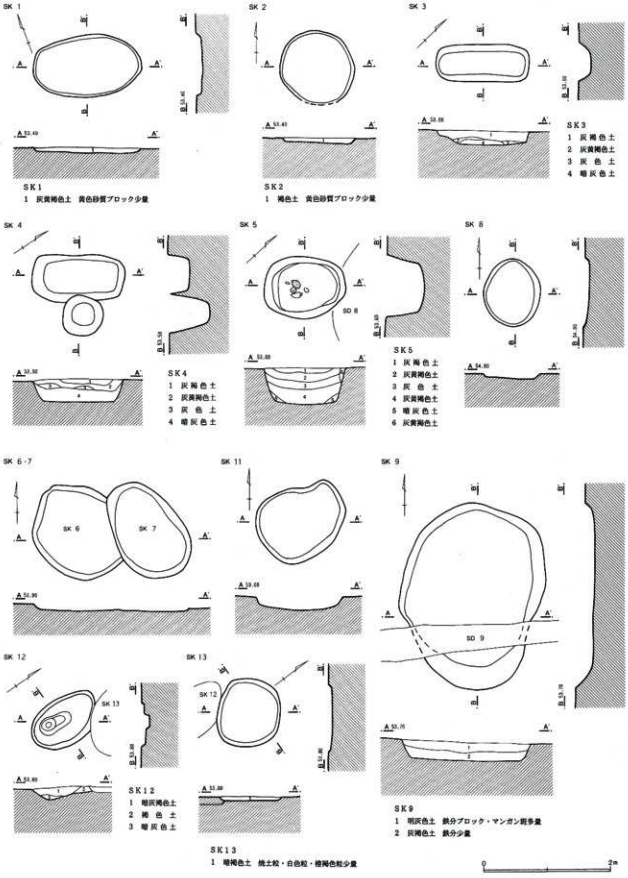
（1）　墓壙（第83図）

調査時には第10号土壙としたものである。DD－31グリッドに位置する。流路と考えた第10号溝跡の断面観察の際にベルトにかかって検出された。第10号溝跡の埋没後に掘りこんでいる。ベルト部分が残存しているだけなので平面形は良くわからないが、調査時の所見では隅丸方形と推定している。残存部分で径64cmである。深さは35cmである。覆土上層には浅間A火山灰と見られる白色粒子が多量に含まれていた。2層は炭化物層で、層高は0.5cm～2cmである。その下からは骨片と思われるものが検出されたが、遺存状況が悪く膜状になっていた。遺物は出土していない。

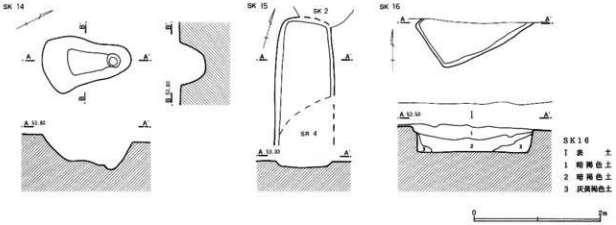
他に遺物は出土していない。

第83図　第1号墓壙

第84図　土壙(1)


SK 1
SK 2
SK 3
SK 4
SK 5
SK 6
SK 6・7
SK 7
SK 11
SK 9
SK 12
SK 13
SD 8
SD 9
SK1
1 灰黄褐色土　黄色砂質ブロック少量
SK2
1 褐色土　黄色砂質ブロック少量
SK3
1 灰褐色土
2 灰黄褐色土
3 灰色土
4 暗灰色土
SK4
1 灰褐色土
2 灰黄褐色土
3 灰色土
4 暗灰色土
SK5
1 灰褐色土
2 灰黄褐色土
3 灰色土
4 灰黄褐色土
5 暗灰色土
6 灰黄褐色土
SK12
1 暗灰褐色土
2 褐色土
3 暗灰色土
SK9
1 明灰色土　鉄分ブロック・マンガン斑多量
2 灰褐色土　鉄分少量
SK13
1 暗褐色土　焼土粒・白色粒・橙褐色粒少量
0
2m

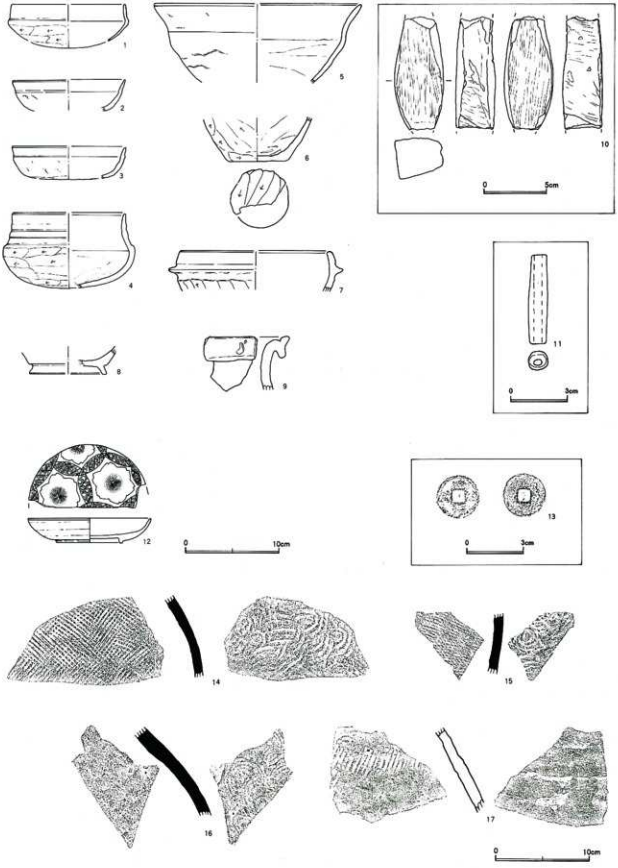
第85図　土壙(2)



7　グリッド・その他出土の遺物

グリッド等で出土した遺物は、量的には少ないがその中では古墳時代後期のものが多い。また、中世及び近世の遺物が若干出土した。中近世の遺物は、主に河川跡と思われる部分の上層からの出土である。これらの遺物が出土することから遺跡南側にかかる河川跡と思われる谷状の地形は中世にはほぼ完全に埋没していたものと思われる。9・17は常滑産である。9は13世紀後半、17は13世紀前半頃であろう。13は銭種不明。かなり粗悪な作りである。

第24表　グリッド・その他出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器坏	(12.0)			BDEH	Ⅲ	赤	15	Y-38G
2	土師器坏	(12.0)	3.2	(7.6)	BDEH	Ⅱ	鈍い橙	20	CC-34　No.1
3	土師器坏	(12.0)			H	Ⅱ	橙	10	不明(注記消滅)
4	土師器坏	(12.0)	7.8		DEH	Ⅲ	赤橙	30	Y-38G
5	土師器鉢	(22.0)			BDEH	Ⅲ	橙	30	Y-38G
6	土師器甕			(6.0)	BEHJ	Ⅱ	鈍い赤褐	30	Y-38G
7	土師器羽釜	(16.0)			DEHJ	Ⅲ	灰褐	10	GG-31
8	高台付坏			(8.0)	EHJ	Ⅰ	灰褐	15	埋没谷B新　No.1
9	甕				EHJ	Ⅰ	灰褐	破片	埋没谷B新2層　常滑
10	砥石	長さ (8.80) cm、幅3.80cm、厚さ3.20cm、重さ150.44 g						100	表採
11	土錘	長さ4.65cm、径1.00cm、重さ4.97 g				Ⅱ	橙	100	埋没谷B新　No.1
12	皿	(13.0)	2.6	6.9		Ⅰ	白	50	表採
13	古銭	直径2.30cm、孔径0.55×0.55cm、重さ2.67 g						50	表採
14	須恵器甕				EHJ	Ⅰ	灰褐	破片	SK5
15	須恵器甕				HJ	Ⅰ	灰	破片	EE-32
16	須恵器甕				HJ	Ⅰ	灰白	破片	表採
17	甕				HJ	Ⅰ	灰	破片	EE-31　P-1　常滑

第86図　グリッドその他の出土遺物